〔駒沢女子短期大学　研究紀要　第31号　P.67～101　1998〕

19世紀のフランスにおける パリ語と方言のせめぎあいの中に生きた人々
――ALFの調査者エドモンが会った700人――

佐々木　英　樹

People at War between Accepting and Resisting Standard French during the 19th Century
――E.Edmont's 700 informants for the ALF――

Hideki　SASAKI

ALF stands for the *Atlas linguistique de la France* (1902-1910), the fieldworker and editor of which were Edmond Edmont (1849-1926) and J.Gilliéron(1854-1926) respectively.

The purpose of the present paper is to answer the following two questions. The first one is――In what linguistic environments were Edmont's 700 informants and others leading their daily lives during the 19th century? And the second one is――What proportion of Patois to Standard French is each map of the ALF supposed to represent on the average?

In answer to the first question the paper concludes: Just as the above title of the present paper suggests, they were living sandwiched in between Standard French as victorious and Patois as doomed to disappear but persistent.

Regarding the answer of the second question, we can get almost no information on the individual qualities of about 84 out of the whole 704 (to be more exact) informants. Therefore we 'extrapolate' the following conclusion from the solid information of the remaining 620 informants. We can thus answer the second question: Each map of the ALF unfolds that "speech landscape" before readers in which Patois and Standard French are intermingled on the average with the ratio of 2:1 respectively.

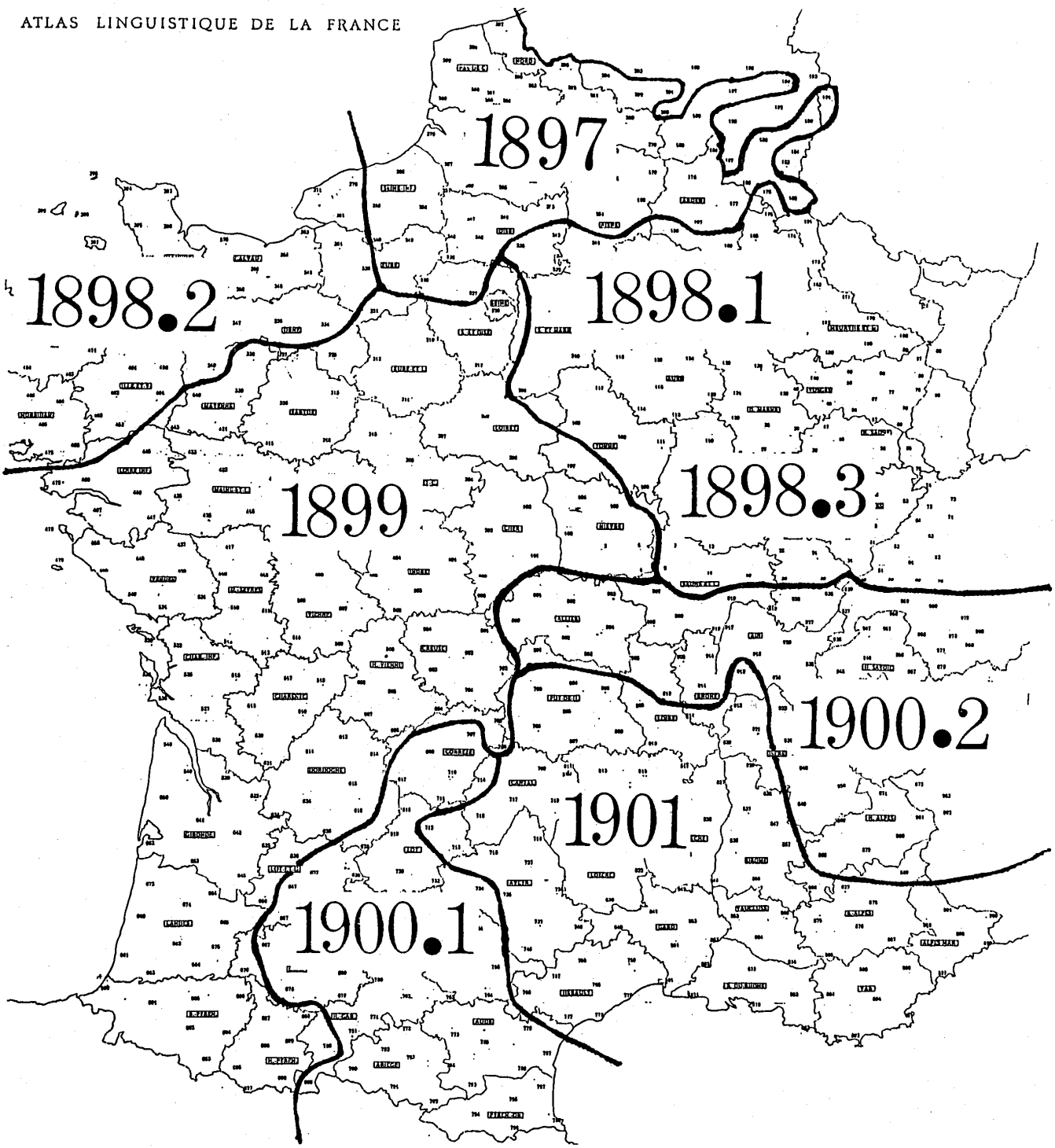
1　小論の目的と結論

ALFとは『フランス言語地図』Atlas linguistique de la Franceの略称です。エドモン Edmond Edmontが一人でフランス全土を臨地調査(1897-1901)し、その資料をもとにジリエロンJules Gilliéronが整理し、地図化し、出版した(1902-1910)ものです。地図2千枚におよび大部なもので、1905年以後、それに基づいて、ジリエロンの主張する言語地理学の理論を具体的に示しました。質・量ともに、フランスにおいてはもちろんのこと、世界的にみても最初の本格的な言語地理学の実践と言えます。その影響は今なお脈打っており、日本の方言学もこの系統を汲む派が主流を占めています。

小論には目的がふたつあります。目的1は、今からちょうど100年前に、エドモンがジリエロンの意を受け、開始したこのALFのための臨地調査に協力した704人のインフォーマントがどのような時代に生きた人々なのかをできるだけ具体的に示そうとするものです。今「どのような時代」といったのは、「フランスの言語事情という観点から、どのような時代」に生きた人々だったのか、ということです。

それに対する私の結論は、表題が示すとおり、「パリを中心とするフランス標準語Frenchとそれ以外の地域の伝統的な言語、つまり方言Patoisとの攻防の時代」だった、ということです。

さらに、エドモンが選んだ704人のインフォーマントに即して、もう一歩押し進めたい。つまり、では、パリ語と方言の攻防の時代のもとでALFの分布地図が描く世界に、どういう傾向が認められるはずだ、と考えられるか？この問にどう答えるか、という問



ALF Notice (pp. 25-8) に基づき地図化

地図 1　エドモンの臨地調査 5 年間の足取り

1897年（8月1日）から1901年までの各年の調査範囲を示した。1898年は1898.1→1898.2→1898.3の順で行ったことを示す。但し、ベルギー南部（フランス語地域）で1897年にやり残した10地点の内4地点を1898.1、6地点を1898.3で行った。1900年は1900.1→1900.2の順で行ったことを示す。1901年の調査範囲は中央山地Massif centralとほぼ一致する。

い掛けです。言い換えれば、「エドモンが選んだ704人のインフォーマントからの情報から出来ているALFの分布地図一般に言語に関する点で、どのような特色があると推定できるか？」という問に答えたい。これが小論の目的２です。

1881・1882年の義務教育の実施、およびそれに伴う義務教育の無償化をはじめとするフェリー法の制定以後、それまでになかった着実な歩みで、フランス各地の方言色が付着したフランス標準語化が進んだのでした。

フェリー法の適用をうけた年齢層のインフォーマント（調査当時12-20才）は36人でこれは全インフォーマントの５％に当たります。他の95％のインフォーマントはフェリー法の恩恵を受けていない人たち、と考えていい。では、この他の95％のインフォーマントたちが専らPatois方言の使用者であったか、というとそうは即断できません。そう意味で、年齢層以外に、知りたい情報が少なくとも他に二つあります。男女比と職業（学歴）です。これらの統計を分析する必要があります。

インフォーマントの男女比を見てみましょう。女性は「60名以上」（Pop 128）とありますので、今60名とします。私の計算では、全インフォーマント数は704人で、その内男女別が分かっているのは691人です。つまり、13名（約２％）は、性別が不明です。それを除いて、全数691名についてみますと、男性631名（91％）、女性60名（９％）という比になります。圧倒的に男性の多いことがわかります。

ベルギーの方言学者ポップは、インフォーマントの職業から学歴を推定しました（Pop 126-9）。それに基づくと、下記のようになります。詳しい内訳は、本論で見ていただきます。これから分かることは、女性は中等教育を受けた人がいない。不明と記入している欄は「不明」ということがはっきりしている

	男性	女性
非識字者	3（0％）	2（0％）
〔教育１〕初等教育あるいはその一部を受けた人／それと同等の教育	341（56％）	50（8％）
〔教育２〕中等教育を受けた人	208（34％）	0
不明	0	3（0％）
	552（91％）	55（9％）

人です。上の表によるインフォーマントの総数は、607名ということになり、上で挙げた総数704名と差（97名）があります。職業名が記してない調査票が97部（約14％）あるということになります。

上の表から次のことが言えます。まず、①「女性は就学年数が少ない」。次に、②男子で「中等教育を受けた人」は「インテリ階級で、現代の方言調査者なら、好ましくないインフォーマントとする類」とポップは言っています（p.126）。最後に、③小学校までの教育を受けた男女と教育をいっさい受けなかった人（つまり、非識字者）の合計は全体の65％です。これが方言を話す層と言っていい。

以上を要約すると、次のことが言えます。

(1)フェリー法の恩恵を受けなかった年齢層のインフォーマント（調査当時 12-20才以外）は全インフォーマントの95％で、この層は、エドモンの調査時点でも方言を日常的に使用していた、と推定できます。

(2)ポップがインフォーマントの職業から推定した学歴に基づけば、男女合わせたインフォーマントの65％が、エドモンの調査時点でも方言を日常的に使用していた、と推定できます。

(3)ポップがインフォーマントの職業から推定した学歴に基づけば、男女合わせたインフォーマントの34％が、エドモンの調査時点でフランス標準語を日常的に使用していた、と推定できます。

以上が、上の設問「エドモンが選んだ704人のインフォーマントからの情報から出来ているALFの分布地図一般には言語に関する点で、どのような特色があると推定できるか？」に答えられる平均的な線と考えられます。このことを踏まえ、上記「小論の目的２」に対する結論は下記のようになります。

【全インフォーマント704名のうち97名の職業およびそれから推定した学歴に関する情報が不明です。その不明分の傾向が、分かっている607名分とほぼ同じ傾向（〔教育１〕と〔教育２〕の比が２：１／上記の表を参照）を示していると仮定して】

ALFのそれぞれの分布地図は、方言とフランス標準語との出現率は、平均２：１の割合である。

以下、上のような結論を導いた根拠を、示します。①エドモンの調査結果（２）、②19世紀のフランスに

おける小論と関連する出来事(**3**と**4**)、の二つに分けます。必要に応じて、そのつど佐々木(H.S.)の注釈を付します。

2　エドモンのインフォーマント

主として、ポップ S.Pop (1950:124-130) によりました。

2.1　調査期間(地図1参照)

エドモンは、1897年から1901年にかけての5年間で、639地点【佐々木の計算によれば637地点】を回った。そして100万以上の回答を得た。

調査は1897年8月に始まり、150日以上かけて、当時の交通機関の状態の中で、67地点【66—H.S.】を調査した。従って、移動日を含めて、1地点の方言を2日以上にわたって調査したことになります。

2年目である1898年も、ほぼ同じ、地点あたりの調査時間でした。もっと正確にいえば、1地点宛の調査時間がほぼ2日以内に短縮された。しかし、翌1899年からの調査時間は全体で、逆に、少し長くなった。調査項目が増えたためです(Pop 1950: 117)。調査地点数は、1898年:184。1899年:156。1900年:136【135—H.S.】。1901年:96。

2.2　1地点の調査に要したインフォーマントの人数

(1)1地点をインフォーマント1人で調査した地点数
——————————約550

(2)1地点をインフォーマント2人で調査した地点数
——————————約 70以上

その内訳　①夫婦(夫と妻)あるいは同一家族内の2名
②最初が高齢者の場合は、二人目は大抵それより若い人。但し、時には年齢差が大きい二人のインフォーマントの回答について、どちらの回答がどちらのインフォーマントのものか、ALFの分布地図からでは分からない。

(3)1地点をインフォーマント3人で調査した地点数
——————————6

その内訳　地点 10/146/199/318/368/685.

(4)1地点をインフォーマント4人で調査した地点数
——————————2

その内訳　地点 179/404.

(5)インフォーマント名が記入されていない地点数
——————————4

その内訳　地点 177/247/263/282.

2.3　インフォーマントの職業と教育度(推定)

2.3.1　男性

インフォーマントの学歴はその職業から推定しています。以下に示す第1種の職業からは、中等教育の学歴をS. ポップ Popは推定しています。第2種の職業からは、初等教育の学歴を推定しています。

〔第1種〕中等教育の学歴を推定させるこの職業についている地点数は、200以上(これは、全体のほぼ3分の1)。これに該当するインフォーマントは、各地点のインテリ階級で、現代の方言調査者なら、好ましくないインフォーマントとする類です。

(1)役場関係——————————77地点

内訳：長(郡長など)		10
	助役	4
	秘書	55
	役場職員	8

(2)小学校関係(現役または退職)——58地点

内訳：教師		48
	教師の義父	1
	補助教師	7
	公立小学校の校長	1
	初等教育視学官	1

(3)その他

治安裁判所書記	9
小金利生活者	6
小地主	5
公証人見習い	5
ホテル業者	4
公証人	4
保険代理人	3
郵便局長	3
新聞の特派員	3
土地測量技師	3
大学生	2

会社員	2
退役憲兵	2

以下各1
元校長、理事、元理事、警官、弁護士、市役所の司書、教会の聖歌歌手、駅長、楽（団）長、商人、師範学校学生、神学生、鉄道員、商店員、農場主、レストラン給仕長、元教師、体操教師、元中学校長、土地管理人、獣医、ぶどう園経営者。

〔第2種〕高等教育を受けないと就けない職業ではないと判断したもの。各地の有力者の紹介があったと思われる。合計341地点(女性を除く。女性の職業については下記（**2，3，2**）参照)

(1)農耕者――――――――――――――98地点

内訳：農夫	36
零細農夫	16
農村巡査	46

(2)労働者――――――――――――――31地点

内訳：農業労働者	9

以下各2
パン焼き職人、労働者、蹄鉄工、坑夫。
以下各1
ボタン職人、石切工、綱製造職人、手袋製造職人、眼鏡製造業者、機械修理工、鋳物工、ペンキ職人、港湾労働者、仕立て職人、染色工、織工、植字工、ガラス工。

(3)その他

日雇い労働者	22
宿屋の主人	18
靴修理業	15
家事業	13
籠業	9
蹄鉄業	9
守衛	8
タバコ小売商	8
農村郵便配達夫(現・元)	7
建具師	7
ぶどう栽培人	7
車大工	4
理髪師	4
煉瓦（れんが）工	4
樵（きこり）	4
馬丁（ばてい）	3
漁師	3
聖具納室係	3
洋服屋	3

以下各2
取次業者、酒類小売商、鍛冶（かじ）屋、居酒屋、道路工夫、農村整備夫、大工、樽屋、機（はた）織り工、

以下各1
（馬車の）御者、床屋＋カフェー、門番、裁判所の門番、郵便馬車、郵便局員、市中に布告を触れ回る役人、奉公人、食料品店＋パン屋、食料品店＋種子店、食料品店＋裁縫材料商人、靴の胴製造業者、ビール会社のボーイ、ホテルのボーイ、時計屋、零細の手芸材料商人、養蜂家、羊飼い、パン屋、馬具製造、居酒屋＋タバコ屋、鉄道保線夫、整形外科医用帽子製造、分益小作人、製粉業、刈り入れ人、卸売商人、石版工、鬘（かつら）製造業、強制執行吏、新聞配達人、製本屋、時計修理工、木靴製造工、塩商人、縦挽き製材工、馬具師＋居酒屋、なめし革工、麻の皮はぎ工、織工、ろくろ鉋（かんな）工、粉屋の下男、篭（かご）屋。

2．3．2　女性

〔第1種〕(職業から推測して)下層の人よりも少し上の教育を受けたと考えられる女性の職業。26名。

教師の妻	6
地方自治体の書記の妻	4
ホテルの従業員	2
ホテルの女主人	2

以下各1
教師の娘、教師の母親、牧師の妻、退役憲兵、公認賭博場従業員の妻、ホテル業者の娘、娘（たぶん)、義理の娘、宿屋の主人の義理の姉、居酒屋の

おかみ、居酒屋のおかみ＋農婦、ホテルの主人のおば。

〔第２種〕(職業から推測して)せいぜい良くて小学校教育の一部をうけただけ（19世紀の終わりだというのに！）と考えられる女性の職業。

主婦	4
婦人服仕立屋	3

以下各２
農婦、農村監視人の妻、日雇女、(農村の)日雇労働者、お手伝いさん、ホテル従業員。
以下各１
道路工夫の妻、石切工の妻、牛乳配達人、洗濯女、洗濯係。

〔第３種〕その他。記入の仕方が曖昧なため、判断できなかったもの。

「おばあさん」	2
「若い娘」	1

２．４　インフォーマントの年齢

２．４．１　年齢層の割合

(1)分類１（５才きざみ）

15 (b.1882-6)-20(b.1877-81)才 / 28名(04%)
21 (1876-80) -25(1872-6)...../ 34名(05)
26 (1871-5) -30(1867-71)...../ 78名(11)
31 (1866-70) -35(1862-6)...../ 72名(11)
36 (1861-5) -40(1857-61)...../129名(19)
41 (1856-60) -45(1852-6)...../ 75名(11)
46 (1851-5) -50(1847-51)...../ 91名(13)
51 (1846-50) -55(1842-6)...../ 36名(05)
56 (1841-5) -60(1837-41)...../ 69名(10)
61 (1836-40) -65(1832-6)...../ 24名(04)
66 (1831-5) -70(1827-31)...../ 30名(04)
71 (1826-30) -75(1822-6)...../ 8名(01)
76 (1821-5) -80(1817-21)...../ 5名(01)
(調査地点: 114, 158, 242, 466, 913)
81(1816-20) -85(1812-6)...../ 4名(01)
(調査地点: 27, 63, 285, 905)
((683)) 100%

注：(b.1882-6) は「1882年から1886年の間に生まれた」という意味。以下同様。

(2)分類２（10才きざみ）

15(b.1882-6)-20(b.1877-81)才/28名(04.1%)
21(1876-80) -30(1867-71).../112名(16.4)
31(1866-70) -40(1857-61).../201名(29.4)
41(1856-60) -50(1847-51).../166名(24.3)
51(1846-50) -60(1837-41).../105名(15.4)
61(1836-40) -70(1827-31).../ 54名(07.9)
71(1826-30) -80(1817-21).../ 13名(01.9)
81(1816-20) -85(1812-6)..../ 4名(00.6)
((683)) 100%

(3)分類３（ほぼ20才きざみ）

15(b.1882-6)-20(b.1877-81)才/28名(04.1%)
21(1876-80) -40(1857-61)才../313名(45.8)
41(1856-60) -60(1837-41)才../271名(39.7)
61(1836-40) -85(1812-6)才.../ 71名(10.4)
((683)) 100%

(4)分類４

15(b.1882-6)-20(b.1877-81)才/28名(04.1%)
21(1876-80) -60(1837-41)才./584名(85.5)
61(1836-40) -85(1812-6)才../ 71名(10.4)
((683)) 100%

２．４．２　補足

(1) 15才未満のインフォーマント（女１男７名）と推定25才くらい（男１名）――

地点 294：①13才のとても聡明な少女と②その母親が回答（Notice 38)。

地点 368：①②③《小学校の先生が選んだ12才くらいのとても聡明な少年３人》が回答（Notice 40)。

地点 404：①－④《その村の中心地から１kmくらい離れた集落の出身である12才くらいの４人の少年》と《この地域出身で、小学校の教員助手を勤めている25才くらいの男性》の計５人が回答（Notice 41)。

(2) 年齢無記入の地点番号（13地点）――
64; 177; 210, 263, 267, 282; 367, 368, 396;

476; 504; 842, 861:

(3) 調査地点の出身者ではなかったが、調査時点に、その調査地点に住んでいたインフォマントの地点番号（16地点以上）——
28, 54, 63; 107; 267, 268, 278; 303, 321, 367; 400, 458, 462; 514, 525; 685,等

(4) 調査時点で、調査地点に住んではいなかったが、その調査地点の生まれであるインフォーマントの地点番号（9地点以上）——
70; 475, 483; 509, 529, 549; 619, 635, 697, 等

3 19世紀のフランス語事情

[Weber pp.69/74/79-84/88/313/318]

ここでは、19世紀初頭から末までのフランス語がどんな状況にあったかを見ておきます。この世紀のフランス語にまつわる、歴代政府の最大の課題は、フランス各地の方言を、北フランスのパリを中心とすることばにすること、つまり、フランス標準語化する、ということでした。この期間—19世紀— を通して、フランス標準語化につよく抵抗した地域を三つ挙げるとすれば、①フランス南部、中でもスペイン国境地帯から東に向かって地中海沿岸の諸県の方言、②「フラマン語」と呼ばれる、ベルギーからフランス最北端部に続く一帯の方言、③ブルトン語（ケルト語系）の残存地域であるフランス最西端のブルターニュ半島。その中でも西に行けば行くほど抵抗が強かった。以下、それぞれについて、もう少し詳しくみてみます。

フランス南部方言は、プロヴァンスProvence地方（フランス南東部）とスペイン国境地帯ピレネーPyrénées山脈西部のバスクBasque地方（フランス南西部）に分けて考えるほうがいい。プロヴァンスProvence地方から見ます。

1820年代のこと。南部方言の代表格のプロヴァンスProvence地方のヴォークリューズ県［84］の大きな町、アヴィニョンAvignonに近いある村の教会でのことでした。その日は初聖体を祝う、特別なミサの日でした。いつも土地の方言で説教する神父は、その日の説教も土地の方言で話しました。ところが集まった信徒の村人は、この特別な日には当然、説教はパリ語（＝フランス標準語）でおこなわれるだろうと思っていましたから、怒ったといいます。だれもパリ語が分からないのに。しかし、この日のような特別荘厳な儀式の日にはパリ語がふさわしい、と思ったからです。その時ミサにでていた村人の一人が後年、上のような述懐をしています。

南部方言でも特に南東部のプロヴァンスProvence地方は、自分たちの方言に誇りをもっていました。1854年プロヴァンス地方にフェリブリージュFélibrigeという会が、若い文学者を中心に作られ、フランス南部方言とその文学の保護を謳ったものでした。詩人F．ミストラルFrederic Mistral（1904年／ノーベル文学賞）もその一人でした。また翌年1855年からは年鑑*Armana provençau*を発刊。その年には500部発行しました。これらの運動は、プロヴァンス方言の保護と再興が目的でした。しかし、このように、こうした運動を起こすこと自体が、プロヴァンス方言が衰退の一途にあるということを示します。しかし、ミストラルの田園叙事詩の傑作ミレーユ*Mirèio*が出版された1859年頃までには、プロヴァンス地方の上層階級の文学者はパリ語で作品を書いていたといいます。

次に、スペイン国境地帯ピレネーPyrénées山脈西部のバスクBasque地方（フランス南西部）を見てみましょう。

1860年代および1870年代の教育目標でした「フランス標準語教育」の成果がでてくるのが1890年代の末ですが、教育の成果が見られ始めた最も早い時期が1880年代だったといいます。しかし、1881年の報告ですら、バスクBasque地方では、児童は学校から帰ると、パリ語を使うことはなかった。それどころか、「パリ語の霊に取りつかれ」ないようにしようとする頑な人が多かった、とあります。

1890年、ピレネー山脈中部のアリエージュ県［09］でのこと。殺人犯が巡回裁判にかけられました。ところが、この犯人は方言でしか話せません。方言の通訳が必要だったと考えられますが、その点については記録がありません。

1896年の記録。「ピレネー山脈地帯の村長はたいていパリ語の読み書きがほとんど出来ない」。それは、18世紀中葉で学校に行かないで育った世代とすれば当然のことです。ですから、村長さんは法規も読めないし、内容も理解できない。そこで、事務はすべて秘書任せだった、といいます。

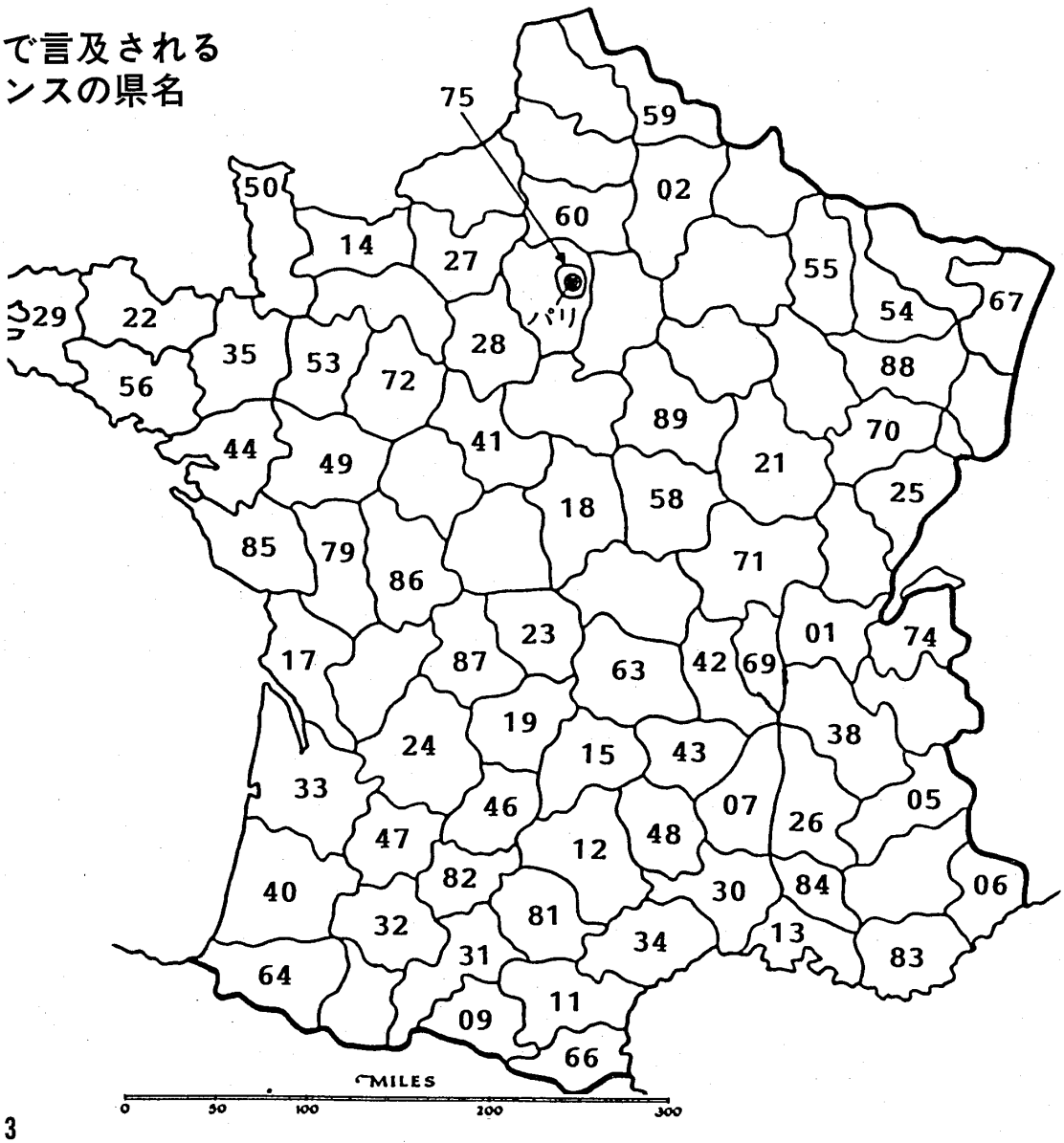
フランスの地方名

Weber (1976:XV) の地図 Historical Regions を一部削除・追加したもの

地図 2　フランスの地方名：索引

アルザスAlsace地方
　ヴィヴァレVivarais山地
　ヴォージュVosges地方
オーヴェルニュAuvergne地方
　コースCausses高原
サヴォアSavoie地方
　サントンジュSaintonge地方
ドーフィネDauphiné地方
ノルマンディーNormandie地方
　バスクBasque地方
ピカルディーPicardie地方
ピレネー山脈Pyrénées地方
フランシュ＝コンテFranche-Comté地方
ブルゴーニュBourgogne地方
ブルターニュBretagne地方
ブルボネBourbonnais地方
プロヴァンスProvence地方
　フォレForez地方
　ペリゴールPerigord地方
　ペルシュPerche地方
ポアトゥーPoitou地方
　ボルドーBordelais/Bordeaux地方
　モルヴァンMarvan森林
ラングドックLanguedoc地方
リムーザンLimousin地方
ロレーヌLorraine地方

本文で言及されるフランスの県名



地図 3
フランスの県名：索引

アン [01] 県
エーヌ [02] 県
オート＝ザルプ [05] 県
アルプ＝マリティーム [06] 県
アルデーシュ [07] 県
アリエージュ [09] 県

オード [11] 県
アヴェロン [12] 県
ブーシュ＝デュ＝ローヌ [13] 県
カルヴァドス [14] 県
カンタル [15] 県
シャラント＝アンフェリエール [17] 県
（現シャラント＝マリティム県）
シェール [18] 県
コレーズ [19] 県

コート＝ドール [21] 県
コート＝デュ＝ノール [22] 県
クルーズ [23] 県
ドルドーニュ [24] 県
ドウー [25] 県
ドローム [26] 県
ウール [27] 県
ウール＝エ＝ロアール [28] 県
フィニステール [29] 県

ガール [30] 県
オート＝ガロンヌ [31] 県
ジェール [32] 県
ジロンド [33] 県
エロー [34] 県
イール＝エ＝ヴィレーヌ [35] 県
イゼール [38] 県

ランド [40] 県
ロアール＝エ＝シェール [41] 県
ロアール [42] 県
オート＝ロアール [43] 県
ロアール＝アンフェリエール [44] 県
（＝現：ロアール＝アトランテイック）
ロット [46] 県
ロット＝エ＝ガロンヌ [47] 県
ロゼール [48] 県
メーヌ＝エ＝ロアール [49] 県

マンシュ [50] 県
マイエンヌ [53] 県
ムルト＝エ＝モーゼル [54] 県
ムーズ [55] 県
モルビアン [56] 県
ニエーヴル [58] 県
ノール [59] 県

オアーズ [60] 県
ピュイ＝ド＝ドーム [63] 県
バス＝ピレネー [64] 県
（現：ピレネー＝アトランティック）
ピレネー＝オリエンタル [66] 県
バ＝ラン [67] 県
ローヌ [69] 県

オート＝ソーヌ [70] 県
ソーヌ＝エ＝ロアール [71] 県
サルト [72] 県
オート＝サヴォア [74] 県
パリ [75]
ドウー＝セーヴル [79] 県

タルン [81] 県
タルン＝エ＝ガロンヌ [82] 県
ヴァール [83] 県
ヴォークリューズ [84] 県
ヴァンデ県 [85]
ヴィエンヌ [86] 県
オート＝ヴィエンヌ [87] 県
ヴォージュ [88] 県
ヨンヌ [89] 県

フラマン語（西ゲルマン語系）のベルギーからフランス最北端部に続く一帯はフランス標準語化につよく抵抗した地域の一つです。

1890年代までフラマン語を使い続けた人が多くいました。1884年、学校の教師の報告書によれば、抵抗を示しながらも、ゆっくりとフランス標準語を受け入れている、とあります。

フラマン語を使う人々はふつうカトリックの信徒でした。ですから、教会の説教や公教要理はフラマン語でした。そのことで、行政側と教会側の対立がありました。1890年、大臣通達で、フラマン語による宗教教育が禁じられました。しかし、実効はありませんでした。1896年、行政側から教会側に善処を要請されましたが、当時の大司教は、断りました。行政側と教会側の対立が沈静化の兆しが見えたのは1905になってからでした。

作家でもあり、政治家でもあったアンドレ・マルローAndre Malraux (1901-76) の祖父はフランス最北端部のノール県［59］の北海に臨む貿易港ダンケルクDunkerqueの船主でした。1909年に亡くなりましたが、生涯フラマン語を使い、パリ語は使わなかったといいます。

ブルトン語（ケルト語系）の残存地域であるフランス最西端のブルターニュ半島。その中でも西に行けば行くほど抵抗が強かった。ブルターニュ半島の最西端のフィニステール県[29]、その東側の二つの隣接県コート＝デュ＝ノール［22］（北側）とモルビアン［56］（南側）の両県の西半分は、エドモンの調査対象地域に入っていません。つまり、今挙げた1県と2県の西半分は、『フランス言語地図』(ALF) の調査地域から除外されています。これら3県がブルトン語圏と見なされた、ということです。

1894年のこと。半島突端のフィニステール県[29]の学校に任命された教師は、ブルトン語が話せなくて、ブルトン語辞典が必要なくらいでした。

20世紀初頭、フィニステール県［29］オーディエルヌ湾でのこと。正式な船員として登録されるためには、パリ語の読み書きが出来なければなりませんでした。その「船員登録試験」は、次のような要領で実施されました――試験官：受験者にパリ語で印刷された本を開いて、「これ読めますか？」受験者：（意味が分からないが、見せられた頁を見ながら）綴り字を綴る。試験官：受験者がパリ語を「読める」と判定。今度は、パリ語の書き取り。文を一つ読み上げ、受験者にそれを書き取るように指示する。受験者：(書き取れない)。試験官：該当の文を受験者に見せる。受験者：（それを見ながら、たどたどしく書き取る)。試験官：受験者がパリ語を「書ける」と判定。総合して、試験官は受験者はパリ語が「読める」し、「書ける」と判定し、合格と認定。――つまり、この受験者のパリ語は、村の教会の聖歌の先唱者のラテン語と同じだ。歌えるが、意味が分からない。最後にそうつけ加えています。

第一次世界大戦（1914-8）中、1916年、ブルターニュ半島のコート＝デュ＝ノール県［22］出身の兵士ロランFrancois Laurentがスパイの容疑で処刑されました。彼がパリ語で意志を伝える事が出来なかったため、外国人だと思われたからです。

この他に、フランス北東部でドイツと隣接するアルザス・ロレーヌAlsace=Lorraine地方にも言及しておくべきでしょう。普仏戦争（1870-71）のフランス敗北によってドイツ領になりました。1871年から第一次世界大戦休戦条約調印（1918年）まで、および第二次世界大戦初期（1940年6月22日）から同末期（1944年）までドイツの占領下にありました。このように、アルザス・ロレーヌ地方には、上記3地方（①フランス南部――プロヴァンスProvence地方とバスクBasque地方、②ベルギーからフランス最北端部に続くフランドルFlandre地方、③ブルターニュBretagne半島）とは異なる特別な事情がありますから、同列には扱えません。アルザス・ロレーヌ地方のほうがいっそう困難な状況にあったことは当然です。

現在でも、この地方のフランス語にはドイツ語の強い影響のあとが見られます。

このように見てきますと、19世紀のフランスにおける言語問題は、パリ方言――上では、あえてパリ語と表現しました――とその他の方言との言語戦争であったことが容易に頷（うなず）けます。

4　パリ語（＝フランス標準語）普及・阻害要因

19世紀フランスにおける言語上の最大の関心事は、パリ方言とその他の方言との勢力争いでした。近代

国家を目指すフランスにとっては、標準語の普及が焦眉の問題でした。それを阻害する要因としては、地理的環境――西ヨーロッパ一番の広い国土（543,998sq.km cf.現代スペイン 504,742; 現代ドイツ 356,780; 現代スイス 41,277; 現代ベルギー 30,513)、複雑な国境地帯――も挙げることができるでしょう。しかし、その最大の要因は、国内の政治的不安定でした。そのことを端的に示すものがあります。「1789年から1875年までの間にフランスは13の成文憲法をみてきた」(時本 49)。この事実の裏には、政治体制の目まぐるしい変化があります。下記参照。

制限君主制(1789－1792)
第１共和制(1792－1804)
第１帝制　(1804－1815)
→ 制限君主制(1815－1848)
第２共和制(1848－1852)
第２帝制　(1852－1870)
→ 第３共和制
(1870－1940)

しかし、ここでは、フランスにおける「標準語の普及」の問題にしぼって、その歴史をふり返ることになります。その過程をヴェーバEugen Weber（1976）の、できるだけ出典が確かなものを中心に取り上げ、年代表形式で表し、時代の流れをつかむ手掛かりにします。「標準語の普及」に影響を与えやすい「教育・兵役・移動（交通）・生活様式」の分野を主として、見ていくことにします。

4.1　教育

4.1.1　教育立法 [Weber 209/220/307-9/311/314/324/327/331/547]

標準語教育は多岐の分野と関係がありますので、幾つかの分野に分けて見ます。まず標準語教育を確実に押し進めるためには、法律が基本になります。その歴史です。

1833年６月28日初等教育法を制定／ルイ・フィリップ王制Louis Philippe（1830-1848）の文部大臣ギゾーFrançois Pierre Guillaume Guizot(1787-1874)――

ギゾーは、初等教育を「秩序と社会安定の保証」とするために全力を注いだ。初等教育法の第一条で、この法律の目指す教育を次のように定義している。

(1)読み書き算盤の教育は、基本的技能を与えるものである。
(2)フランス標準語とメートル法の教育は、国家としてのフランスの一体性の意義を植えつけ、あるいは強化するものである。
(3)道徳的、宗教的教育は社会的、精神的必要性に応えるものである。その他、主な内容は次のとおりです。
(4)1816年に当時（ルイ18世／第二王制復古（1815-1830))の王令によって定められた教師の指導能力の基準を再確認した。
(5)指導能力の基準を認めた公証を持たずに学校を運営することが禁じられた。
(6)各県は独自であるいは隣接する他県と合同で、初等学校の教員養成を目的とする師範学校を設立することを義務づけた。
(7)各郡は、単独であるいは隣接する郡と合同で、小学校を設立・維持することを義務づけた。
(8)学校視察官の制度がもうけられた。

この法律は、フランス標準語教育が柱の一つになっているという点で、画期的なものです。地域によって実効の度合いは違いますが、目標に向かった着実に出発できる土台が出来たという点で、フランス標準語教育にとって大きな一歩でした。この法律の実効性を示すものとして、下記のような統計があります。

	学校数	通学生徒数(百万単位)	師範学校数
1833	31,420	1,2	38
1847	62,840	3,6	47

この法律に対する反応は、地方自治体の負担が増すことから、どの議会でも評判は良くなかったようだ。しかし、ブルターニュ半島の突端、フィニステール県［29］の港町オーディエルヌの郡議会だけは、いち早く賛成の声をあげた。その理由は、子供はたいてい漁師か兵隊の家族で、基礎的な教育の必要性を感じていたから。

1867年：教育法令の発布／歴史家でもあったV.デュリュイVictor Duruy（1811-94）が、第二帝制時代（1852-70）に文部大臣（＝公教育相）を勤めた期

間（1863-69）中の1867年。

(1)小学生全児童を対象に授業料無償化を目指し、各地方自治体の議会は授業料を免除し、地方税でその穴埋めをすることができる。

(2)人口500人以上の村は、女子校を設立しなければならない。

実態は、1870年代末までに、全国の該当する村の半分はまだ女子校を建てていないうえ、それも、ふつうキリスト教の修道会によって運営されていた。また、その教育内容は、1880年代までは、きわめてお粗末なものだった。しかし、1880年代の学校に関する法令が、それまで非常に遅れていた「少女の学校教育」にかつてない大きな影響を与えたことは事実だ。その成果が出始めた1890年代には、家庭における女性の役割、学校教育・フランス標準語教育に対する女性の見方が変わってきた。それは、男子師範学校と女子師範学校の数の変化にも現れている。次の統計を参照。

	男子師範学校	女子師範学校
1869	76	11
1887	90	81

1879年：フレシネ計画／第三共和制時代（1870-1940）の当時の公共事業相のフレシネCharles Louis de Saulces de Freycinet（1828-1923）が、経済目的が眼目のこの事業を発案。この計画が正式に発足したのは1881年1月（第一次フェリー内閣当時）。鉄道網・道路網拡張、学校建設等を連結し、沈滞気味の経済を活発化するための総合経済政策、と言ってもいいもの。

フレシネ計画の公共教育にかける意気込みは、下記に示す「公共教育」の予算の伸びにも窺える。

年度	額（フラン）
1878	53,640,714
1885	133,671,671

1881 — 6：初等教育に関するフェリー法の制定／J.フェリーJules François Camille Ferry（1832-93）は1879年公共教育・美術大臣に就任。以後1885年3月30日J.フェリー内閣総辞職までの6年間、ある時は担当大臣、ある時は首相として、特に公共教育に力を注いだ。具体的には次のとおり。

大統領令：

〔1880〕イエズス会の解散を含む修道会活動の制限（＝非宗教主義教育の実施）。

フェリー初等教育法：

〔1881〕公立小学校の授業料等の納入費いっさいを廃止する（＝義務教育の無償化）。

〔1882〕就学登録は、私立・公立にかかわらず義務とする（＝義務教育の実施）。

〔1883〕就学児童が 20 人以上いる村には、小学校を設置する。

〔1885〕学校の建設および教師の給料には、国が補助金を給付する。

〔1886〕小学校での指導計画が、視察・管理に関する詳細な条項と共に、定められた。

上の「フレシネ計画」と「初等教育に関するフェリー法制定」の関係は後者が前者の一部である。第三共和制時代（1870-1940）下のこの時期の内閣の首班は、複雑きわまる。フレシネとフェリーの二人に限定してみてもそう。下記参照。（　）は、フレシネとフェリー以外の首班名を指す。

1879-80 首相：フレシネ第1次内閣
1880-81 首相：フェリー第1次内閣
(1881-82 首相：ガンベッタ)
1882 首相：フレシネ第2次内閣
(1882-83 首相：デュクレール)
(1883 首相：ファリェール)
1883-85 首相：フェリー第2次内閣
(1885-86 首相：ブリッソン)
1886 首相：フレシネ第3次内閣
〔この間に、大統領1人、首相延べ5人が交替〕
1890-92 首相：フレシネ第4次内閣

ここにも、内政の不安定さが読める。政治体制が替われば、政策の連続性はどうしても甘くなりがち。同じ政治体制で、大統領、内閣が替わっても、同じことは言える。フランス政治の難しさが窺える。

1800年代：第三共和制下で義務教育制度の整備に力を注いだ代表的な政治家でもあり、教育学者でもあるF.ビュイソンFerdinand Edouard Buisson

(1841-1932) の名を挙げておくべきだ。彼は、「自分たちの美しく、高貴な母国語である」フランス標準語を教えるということは「小学校の主たる仕事であって、愛国心からでる大変な仕事だ」と。後になって (1927) ノーベル平和賞を受賞。

法律が出来れば、それで終わりというわけではない。法律の目的・理念に合致しない実態がある。いや実は逆で、そういう実態があるからこそ、法律ができるのだ。以下、その実態を見て、標準語教育がどのように進展したか、遅滞したか、を見る。

4．1．2　教育の実態(1)：困難な就学 ―― 貧困

[Weber 290n/305/308/313/320-3/325/327]

1839：オーヴェルニュAuvergne地方カンタル県[15]／子供は少しでも何か働ければ、学校をやめて働きに出る。冬は蠟燭（ろうそく）の灯火で仕事。夏には一日中仕事。

1844：ピレネー山脈Pyrénées地方／小学校の入学登録をした家庭が殆どいなかった理由「この地方は極めて貧乏で、何かを売って教育費にあてるなどということはできない相談だ。子供たちは、山で家畜の番をし、両親は休みなく働く」。

1850年代：オート＝ザルプ県 [05] からアルデーシュ県 [07] にいたる地帯は、アルプスあるいは中央山地に近いため、冬になると、雪で子弟は学校にいけなくなる。秋祭りの市などには、帽子に鳥の羽を刺して、歩いている人が見え始める。帽子に刺した羽が一本は「読みを教えることができる」、二本は「計算を教えることができる」、三本は「ラテン語も教えることができる」ことを意味した。それを見て、どれにしようか親同士、額を集めて相談する。なかなか決心がつかないときは、宿屋にいってその候補者を、それとなく品定めをする。よしとなると、冬の間は各家交替で、各自の家を講師の宿に提供、教室代わりの厩舎と灯・インクを用意。春になると、講師も自分の農場に帰る。礼金ルイ金貨(20フラン)を懐に、出稼ぎ臨時教師故郷に帰る。

1852：ブルターニュBretagne地方フィニステール県[29]／貧しい家では子供が着るものがみすぼらしかったから、親は学校にやりたがらなかった。

1860年代：南西部タルン県 [81] の学校の先生の報告／貧乏な家庭は子供を小学校にやらない。それは、費用が年間18-24フランに本代と文具代などを加わえると、30フランは必要になるから。

1864：学校当局の記録／パリ19区 [75] のラ・ヴィレット地域は、ドイツと国境を接するアルザスAlsace地方出身のドイツ人労働者、またドイツのライン河沿岸地域出身のドイツ人労働者でいっぱいだった。彼らは、フランス標準語はと言えば、数えるほどの語しか知らなかった。その子供たちはフランス標準語は、親よりももっと知らなかったから、フランスの学校になかなか入れなかった。

1867：フランス中部リムーザンLimousin地方のコレーズ県 [19] と同オート＝ヴィエンヌ県 [87] での学童の平均出席率は

	コレーズ県	オート=ヴィエンヌ県	全　国
平均出席率(%)	40.7	39.2	69.1

1870年代：学校視察官によるブルターニュBretagne地方の報告／学校教育の成果は好ましくなく、13,14才の少年は、フランス語を学んでも、その内容がほとんど理解できない。またそれぐらいの年齢まで、学校に通う生徒数はひじょうに少ない。

1870－80年代：中央山地北西部のリムーザンLimousin地方での子供の労働は、1870年代から80年代の間に少しずつなくなってきた。

1876：(1)全国的にみて、小学校に入学すべき人数450万のうちほぼ80万 (約18%) がまだ登録していない。そのほとんどが、農村地域の子弟。しかし、登録はしたが、登校しない学童も多い。

(2)中央山地北西部のリムーザン地方の就学年齢児のうち実際に入学した児童の割合 (%)：

リムーザン地方の県の内２県	60.3 / 55
フランス全体	73.6

(3)季節労働者の多いリムーザンLimousin地方クルーズ県 [23] の就学児童数の割合は、同じリムーザン地方のオート＝ヴィエンヌ県 [87] およびコレーズ県 [19] より、それぞれ７%および12%高かった。この傾向は19世紀末まで続く。

1877：(1)ブルターニュBretagne地方のコート＝デュ＝ノール県[22]のラニヨンLannionには、ほぼ各教区に一つの小学校があった。しかし、３人の子供の内一人は、就学登録をしていなかった。その原因については、孤立した農場・村から学校までの距

離が大きく関係していた。一番人里離れた村に住む子供の登録状況は、そうでない村に住む子供の登録数の半分しかない。

(2)中央山地南部のロゼール県［48］では、学童が通学するのはせいぜい1年に4カ月。イースター（キリスト教の復活祭）が終わると、残るのは幼児クラスだけでした。したがって、学校は廃校になるか、保育園に衣替えするか、どちらかだった。

1880：ブルターニュBretagne地方5県についての学童の通学率（1880）の統計／6才から13才の子供の1/3以上が通学していないことが分かる。下記参照。

県　　名	登校者数(割合)	不登校者数(割合)
モルビアン[56]	40,842(56%)	31,434(43%)
イール＝エ＝ヴィレーヌ[35]	59,309(66)	30,810(34)
ロアール＝アンフェリエール[44]	58,016(68)	27,044(32)
（現：ロアール＝アトランテイック）		
コート＝デユ＝ノール[22]	60,421(67)	30,000(33)
フィニステール[29]	44,084(47)	49,234(53)

1880年代：(1)町に学校があっても、ごく少数の人にしか役に立たなかった。学校から遠い大多数の生徒は、読み書きができないままに終わってしまう。なぜかと言うと、毎年11月から3月の間は、生徒はたいてい、仕事が暇になって学校に通える時期だというのに、道路が雪あるいは雪解けによる洪水などで通行不可能になるから。しかし、この状態は1880年代になると、国道以外の各地の地方道路も整備され始めて、改良された。それに、小さな村にも学校が建てられた。

(2)1880年代以後は、それまで地域によって大きく違っていた就学率がだんだん平均化してきた。

1888：パリ南西部ウール＝エ＝ロアール県［28］のペルシュPerche地方における学校の生徒の出席率は、同県で一番低かった。ブルターニュ地方の県はそれよりもっと低かった。

1890年代：オーヴェルニュAuvergne地方のカンタル県［15］の学校視察官報告／少なくとも19世紀末までには、学童の冬期の登校率は以前よりずっとよくなった。が、冬期以外の登校は相変わらず不規則。この点、ひじょうに遺憾。しかし、教育の水準は以前にくらべ向上した。

1892：ノルマンディーNormandie地方の海に面したマンシュ県[50]／子供がまだ小さくて素足で家の近くを歩き回るだけのうちは、両親は喜んで学校にやります。しかし、もっと成長して身体が出来上がると――その時期こそ一番教え甲斐があるのだが――学校から子供を引き上げさせて、働かせた。

1899：フランス北東部ロレーヌLorraine地方西部ムーズ県[55]／まだ子どもが8才の頃、もう仕事に出されていた。

4．1．3　教育の実態(2)：授業料免除

［Weber:323-4］

→**1837**：1937年までには、小学生3人に一人の割合で、授業料が免除されていた。

1852：フランス中部、オーヴェルニュAuvergne地方カンタル県［15］の学校視察官報告／学校の授業料免除の判断は、自治体に任されていた。そのため、授業料免除の決定権の濫用とも思われる現象が生じた。授業料を免除された生徒の数が増加している。ある自治体は、児童生徒の3/4を貧困家庭と判定し、授業料免除を決定していた。

1853—62：授業料の免除の判定は市町村長の権限だった。1853年のこと。ある自治体では、授業料の免除決定のリストの中に、その長自身の孫、側近の息子、その学区内でもっとも裕福な2家庭の男子（複数）の名前すらあった。それぞれ貧困家庭とみなされていた。このような不公平は珍しいことではなかったようだ。と言うのは、1859年、さらに1862年の二度にわたって、この種のことについて、各県知事宛てに官報で、各市町村長に、法律を遵守させるよう要請しているから。

1861—72年：フランス南西部ジェール県［32］における授業料免除の生徒の比率は下記のようだった。しかし、この率は全国的平均よりも低い。

西暦	学費免除の生徒の率(%)
1861	26
1872	46

1862—78年：パリ南西部ウール＝エ＝ロアール県［28］における授業料免除の生徒の割合と国内平均は下記の通り。

西暦	ウール＝エ＝ロアール県[28](%)	国内平均(%)
1862	26	38

1878	36	57

1872：授業料免除を受けた学童数の割合（%）——授業料免除を決定する権限は各市町村にあったが、その基準は各議会によって大きな違いがあった。

西暦	エロー県[34](南仏)	ロゼール県[48](中央山地南部)
1872	68	86

1881：以前から貧困家庭の子弟のすべて、あるいはその内の何人かは、授業料が免除されてきたのは事実。教会学校は少なくとも原則的には、授業料が払えない人にも学校の門を開いてきた。第一共和国（1792-1804）では、全児童の1/4が授業料を免除されるよう定められていた。ギゾGuizotの法令は、この慣例を再確認したもの。全国規模で、授業料の免除の割り合いが年々増加していたことは下の表が示すとおり。この趨勢を考えれば、1881年の法

西暦	授業料免除の割合(%)
1861	38
1872	54
1877	57

令でJ.フェリーが「公立小学校の授業料をふくむ納入費いっさいを廃止」したのは、当然の結果と言えよう。

4．1．4　教育の実態(3)：困難な学習達成

[Weber 67/76/79/289/306-7/310-3/315/318/328/331/334]

1830—70：いわゆる七月王制（1830-48）から第二帝制（1852-70）を通して、記録にある事／自治体の長・議会議員でも実質的に読み書きができない人がほとんどだった。自分たちが署名する文書の内容が理解できなかった。

1852—70（第二帝制）：(1)フランス南西部ロット＝エ＝ガロンヌ県［47］／「児童は、地図を見ないから、地理を知らない。自分たちの県についても、国についても何も知らない」

(2)フランス南西部ドルドーニュ県［24］／児童は「自分たちの県についても、自分たちの国、フランスについてまったく知らない」

(3)フランス中東部フランシュ＝コンテFranche-Comté地方のドウー県［25］／「地理的知識が一般に欠けている」

1853：フランス北東部アルザスAlsace地方バ＝ラン県［67］の知事からの報告／市町村長の3人に一人がフランス標準語を全然知らない。公務員6人のうち5人はフランス標準語が書けない。このような状況では、フランス標準語を教える先生が絶対に必要。

1861：フランス南東部ドローム県［26］のモンテリマールMontelimar近くの村シャトーヌフ＝デュ＝ローヌChateauneuf-du-Rohneの学校の先生の嘆き／「30年間、たいていの村の学校でフランス標準語を教えてきました」（授業の成果ですか？）「若い農夫が何とかしてフランス語を二言三言口の中でぶつぶつ呟く。その手こずり様ったらありませんよ」こんな状況は、隣りのヴォークリューズ県［67］も同じだった。「パリ語の'パ'の字も分からずじまいで学校を出るのです」

1863：(1)公式な統計によれば／①フランス全人口の4分の1弱はフランス標準語がまったく話せない。②7-13才の学童の11%は、フランス標準語がまったく話せない。③7-13才の学童の37%はフランス標準語が話せるか、あるいは読んだり、聞いたりして理解はできるが、書くことはできない。④フランス89県のうち24県（27.0%）においては、その県の全市町村の半分以上がフランス標準語を話せない。⑤他の6県（6.7%）では、全市町村のかなりの地域が、フランス標準語を話せない。——要するに、相当数のフランス人には、パリ語は外国語であった。今「フランス人」と言った中には、19世紀末の25年間（つまり、1875-1900）には成人に達する子供のほぼ半分が含まれている。

(2)学校教育でも、識字率がなかなか高くならない理由の一つは、学習環境として、大人がフランス標準語を話せないことが挙げられる。

1864：(1)中央山地北東部ロアール県［42］の教育者／「村で、パリ語を口にしてみようものなら、かならず近所の人に冷やかされたり、物笑いになったりする」

(2)南フランスのヴァークリューズ県［84］の学校からの報告／少女は40名まで、数カ月間の条件で入学が許可された。それは、初聖体の準備に公教要理を勉強するため。だから、公教要理を繰り返し聴き、意味も分からず、暗記することだった。それから13

年後(1877年)、中央山地南東側アルデーシュ県[07]プリヴァPrivas市でも、ただ初聖体の準備に公教要理を勉強するために入学した生徒が、全生徒のほぼ半分もいた。そういう人たちは、初聖体が終われば、学校に来なくなる。

(3)地中海に面した南フランスのヴァール県［83］の学校視察官の報告／「生徒は読めても理解していない」。

(4)ブルターニュBretagne地方の学校視察官の報告／「生徒は読むのはかなりすらすらと読めるが、読んだ内容の説明をしたり、自分の方言で翻訳したりすることは出来ない。だから、何も理解していないことが分かる」

1867：フランス南西部オード県［11］・オート＝ガロンヌ県［31］地方の風俗・習慣について、1867年に出版された本に拠る／児童にとって、フランス標準語は外国語だ。それは、ラテン語と同じで身につかない。学校でいくら学んでも、家に帰れば、またいつもの方言に戻る。学童にとっては、フランス標準語は学校のことばだから、すぐ忘れ、けっして話し言葉になることはない。

1870－1889：フランス北東部のヴォージュ県[88]1889年の教員報告／「1870年には、子供は、まだ自分の親たちがやっているのを見た通りに、繰り返していただけだ」。しかし、それから20年近く経った今1889年は、「農民は以前から較べると教育をうけている人が多い。それもあって、もっとお金を稼ごうと思えば、今までのやり方を考え直さなければならないことを知っている」

1873：フランス南西部タルン＝エ＝ガロンヌ県［82］／①「フランス標準語の授業は全然捗らない....生徒は誰もガスコーニュGascogne方言で話す」②「田舎の人でも、子供たちには、読み書き計算ができるようになってもらいたい、と思っています」しかし、不幸にも、親の思いはそう簡単に実現しなかった。

1875：(1)フランス（ピレネー山脈）南西部、現ピレネー＝アトランティック県［64］のレスカルLescar師範学校からの報告書／「フランス標準語が話せる人でも、非常にうまいというほどではない」。

(2)南仏ラングドックLanguedoc地方エロー県［34］／小学校でも、フランス標準語が「この土地の方言に代わる傾向」にあった。

(3)フランス南西部ドルドーニュ県[24]／学校でフランス標準語は勉強するけれども「成果があまり見られない」。若い人は、フランス標準語は読めるけれども、その内容は理解できない。

(4)リムーザンLimousin地方オート＝ヴィエンヌ県［87］／一般に農民の識字率は低い。が、県内で季節労働者の割合が最も高い地域では、農民とその他との識字率の差が殆どなかった。季節労働者は読み書き算盤の意義を知っていたので、識字率は一般に高かった。その影響で、1875年までには、農家の親も学校教育の意義が分かるようになっていた。このように、季節労働者が識字の層を、まず自分の家族、次に、隣人へと、周囲に広げて行く役目を果たした。

1876：(1)ピレネー山脈西部のバスク語地域の学校／バスク語が話せない先生はたいへん苦労した。生徒は、フランス標準語が一言も話せなかったから。

1877：(1)フランス南西部タルン＝エ＝ガロンヌ県［82］／「授業はすべてフランス標準語で行う。でも、一歩学校から出れば、どこでも方言で話す」

(2)「生徒は書き言葉による表現に劣る。方言が日常使われている'田舎'では、書き言葉の教育は難しい」

1878：中央山地南東部のセヴェンヌCévennes山岳地帯／「今の若い者はみんなフランス標準語で話せる」

1880：フランス中部ブルゴーニュBourgogne地方ソーヌ＝エ＝ロアール県［71］のマコンMâcon／方言は1880年頃まで一般に使われていた。第１次世界大戦（1914-18）後にようやく使われなくなった。同じことが次の県や地方に言える。①フランス北東部ヴォージュVosges地方、②フランス中東部フランシュ＝コンテFranche-Comté地方、③フランス南東部のドーフィネDauphiné地方。

1881：(1)フランス中南部リムーザンLimousin地方オート＝ヴィエンヌ県［87］の学校視察官報告／教師ですら、学校の外で仕事をするときは方言を使う。ここの住民にとっては、だいたいフランス標準語は日常言語ではないから、フランス標準語を使っても、めちゃくちゃ。

(2)フランス南東部、地中海沿岸アルプ＝マリティーム県［06］カンヌCannesの小学校視察官報告／カンヌのような小学校でも「考えるとき方言で考える生徒に、フランス標準語を話せるようにさせるのが一番難しい」。

1882：フランス中南部オーヴェルニュAuvergne地方／児童は、学校の外ではけっしてフランス標準語を使わないから、学校で学ぶ時も、授業がほとんど分からない。

1894：フランス南東部プロヴァンス低地地方／この地方の村の子どもは、一世代前までは殆ど文盲だったが、1894年までには、たいてい学校に通っていた。中には、通学時間が歩いて１時間半もかかる所から通っている児童もいた。フランス南西部では、夜、燃え残りの灯火で学校の宿題をしている子どもの勉強姿がみられた。

1897：ピレネー山脈中部アリエージュ県［09］のある校長先生の話／「本県の田舎の学校は大多数がパリ語はほんのわずかしか身につかず、学校から家に帰れば、方言しか使わない。この状況は、これから先もながく変わらないだろう。」

4．1．5　教育の実態(4)：授業内容

［Weber 304/306/308/312/324/332-5］

1840年代：(1)スペイン国境地帯のピレネー＝オリエンタル県［66］のある学校のようす／

①先生はフランス標準語は知らなかったが、ラテン語文法を暗記していた。

②生徒が簡単な綴り字を覚えると、すぐに『キリストに倣いて』と『テレマコス』（ギリシャ神話）を読んだ。

③パリ語で書かれた本は誰も読めなかった。生徒はもちろん、先生も。だから、読む時は　話すように“読んだ”。

(2)田舎の学校は、次に述べる、フランス中部オーヴェルニュAuvergne地方カンタル県［15］と多かれ少なかれ、同じであったに違いない／

①先生は修道尼。

②その修道尼が教えることができるのは「お祈り」と「公教要理」と「足し算・引き算の初歩的な計算」。

1840年代―**1879**：中央山地北東部ソーヌ＝エ＝ロアール県［71］の学校視察官報告／標準的な教科書も徐々に編集されるようになった。しかし、それにも問題はあった。また、教授法のレベルが低いのは、残念なことだが、その後も続いた。この県のある学校では、1879年になっても、ロワイヨモン修道院出版の聖書を唯一の教科書として使っていた。

1861：南フランスの地中海に面したガール県[30]の村の学校の先生が語る愛国心教育／学校とは、国民相互の社会的繋がりを強固にする大きな組織だ。従って、生徒には国民としての愛国心を教えなければならない。そのためには、国家が国民のために何をするか、なぜ国家は税金を強要し、兵役を義務づけるのか、を説明し、母国に対する国民の真の関心とはどういうものか示さなければならない。

1870年代：学校ではフランス史を教えはじめたが、歴代の王朝名とその期間を羅列するだけで、中世以降には踏み込まなかった。歴史はないがしろにされ、市民の権利と義務については、まだ、カリキュラムに登場しなかった。

―**1875**：1875年以前に、聖職者あるいは一般の篤志家が貧困層の人たちのために作った学校の特徴は公教要理を、あるいはラテン語のミサの一部を、意味もよく理解せず、早口で唱えることが出来るようにすることだった。

1875：ブルターニュBretagne地方に隣接する現在のロアール＝アトランティック県[44]（旧ロアール＝アンフェリエールLoire-Inferieur県）／学校では、貧しい家庭の子供たちは別にクラスを作り、無視した。貧困家庭の学童はどこでも“生まれつき劣った”人間と感じられていた。

1877：国家意識を国民に植えつける目的で、子供向けの本『二少年フランスを行く』も出版された。

Bruno,G. (Mme Alfred Fouillée) (1877) *Le Tour de France par deux enfants*

がそれだ。1884年迄に、108刷を数え、1900年頃迄には、出版部数が800万部を越した。その人気のほどが分かる。内容は、アルザス地方の二人の少年が、フランス各地をまわる筋。各地方の生活、風景、歴史、人々などを、挿絵と文で易しく描写したものだ。この本は「フランスは庭で、各地方はその庭に咲いている花」に例えて、フランスの一体感を強調している。

1879：フランス西部、大西洋に面したヴァンデ県［85］の学校視察官報告／「1850-68の間に教員の免許を取得した人（1879現在教壇に立っている先生の半分以上はこれに該当）は、フランスの歴史を学ばなかったから、今でもフランスの歴史を知らない」。

1880：ブルターニュBretagne地方モルビアン県［56］の学校視察官報告／未公認学校のようすにつ

いて――40人以上の、3才から13才までの少女が、箪笥(たんす)、ベッド、格納庫でもう一杯になっている小さな教室にぎゅうぎゅう詰めだった。その学校の女性管理者は、その少女たちに教えていたのは「読み書きでもなく、フランス標準語のかけらも教えていない。ただブルターニュ語の公教要理と祈禱書、それに上級生には、ラテン語の本に載っている歌」。

1881：(1)フランス東部フランシュ＝コンテFranche-Comté地方オート＝ソーヌ県［70］の学校視察官報告／「最近学校で教師がフランス史の主要な出来事を説明し始めた。がまだ今のところ、それは目新しくて、珍しいことだ」

1897：バカロレア資格試験(＝大学入学資格試験)の受験生に、学校での歴史の授業とその目的について論じてもらった。すると、その80%が、歴史の授業の目的は、愛国主義を高揚することにある、と答えた。

19世紀末：ピレネー山脈中部アリエージュ県[09]の小学校の授業で習ったことを確かなものにするいい方法が提案されていた。それは、ちょうど、中学校でラテン語あるいはギリシア語をパリ語に訳すように、「パリ語を自分の方言に訳す」という方法だった。

4．1．6　教育の実態(5)：学校の設備

［Weber 304/334］

1850年代：フランス北部ピカルディー地方エーヌ県［02］／ある村の学校では、「地図も、黒板も、テーブルも、机もなかった」。生徒は各自、木製の厚板を自分の膝の上に置いて書いた。

1864：ある学校視察官の報告／トイレの汚水溜めとか浄化槽のような衛生施設が何もない。校庭の片隅に柵で囲み、その場所をトイレにした学校があった。そこに溜まった糞は時々取り去り、肥料として使った。

1870年代：(1)パリ南西部のウール＝エ＝ロアール県[28]／学校は校舎でもあり、住居でもあった。奥さんが、そして先生も家事をする場所でもあった。授業と平行して、食事の準備をしたり、パンを焼いたりもした。夜になると教室に折り畳み式ベッドを広げ睡眠をとった。

(2) 1870年代末になっても、殆どの学校は暗くて、じめじめ、ぎゅうぎゅう詰めで、換気が悪く、設備もなし、照明が悪く、暖房やストーヴを点けても、温まらないし、悪臭を放ち、煙（けむ）い。すきま風が入るし、まったく嫌になる。不愉快。

1881：どんな小さな教室でも、地図がない教室は殆どなかった。確かに「飾り物」にすぎない場合もあったが、それは、フランスの六角形の国土を頭に植えつける効果はあった。その上、地図でもってフランスの東の国境線は、ヴォージュ県［88］の東側ではなく、もっと東のライン河にあるのだ、ということを忘れさせない役目も果していた【1881年当時は、普仏戦争で敗れた結果、ヴォージュ県を含む、アルザスAlsace・ロレーヌ Lorraine地方はプロシア領地だった】。

4．1．7　教育の実態(6)：教師の適性

［Weber 305/314-5］

1803：中央山地南東部アルデーシュ県［07］／「学校の先生はほとんどがフランス標準語が話せない」

1840—50年代：中央山地南東部アルデーシュ県［07］／フランス標準語の綴り字を正しく書けなかったり，正しい文を作れなかったりする学校の先生が多かった。

1853：フランス中東部ブルゴーニュBourgogne地方北西部ヨンヌ県[89]／ある村の学校の先生が病人を治癒するために、一種のオカルト療法を施した。癌（がん）の患者に蛙を薦めたり、安いブランディーを売って、「子供たちに飲むよう急きたてた」ということがあって、その教師は解雇された。

1881：(1)フランス南西部ピレネー山脈西部バス＝ピレネー県[64]（現：ピレネー＝アトランティックPyrénées-Atlantiques)／教師は自分のフランス標準語に自信がない。しっかりした訓練をしてないから。

(2)フランス南西部ガロンヌGaronne河流域ロット＝エ＝ガロンヌ県[47]／教師がフランス標準語をうまく操ることが出来ない。訓練が不十分なため。

4．1．8　教育の実態(7)：教師の給料・アルバイト

［Weber 305/316-9］

1865：ブルゴーニュ地方北西部ヨンヌ県[89]／怠慢な、あるいはしばしば、読み書きできない市町村長の仕事を代行した。村人の法律顧問になった教師

もいた。県内のジョワニーJoignyという町の助役は、そういう状況をみて、「一番危険なことは、教師が政治に介入しつつあるとさえ言える」こと、と警告した。

1872：パリ南西部のウール＝エ＝ロアール県[28]の公立学校の教師395人に尋ねた／1830年代の貧しい生活から出世して学校の先生になったものの、依然として、生活は楽ではなかった。教師になってどんな副職（アルバイト）を経験しましたか？

359人 ― 公認の書記（法廷・議会などの）
373 ― 聖歌隊指揮者／教会のオルガン奏者
14 ― 堂守(どうもり)／典礼手伝い／教会の鐘係
2 ― 門番、守衛／掃除夫
1 ― 墓堀り人

36人 ― 保険の外交
10 ― タバコ売り
2 ― 地元の電信所を経営

1873－9：王党派のモーリス＝マクマオンMac-Mahon元帥が、大統領に。この治世には、まだ「学校の教師は教会の神父の手伝いをするように」学校視察官が目を配った。

1880：フランス中部オーヴェルニュAuvergne地方カンタル県［15］／教師あるいは貧しい家の人が、遠隔地から来る学校に通う子供を預かる――今風に言えば、下宿屋――を営むことがあった。例えば、こんな様子だ。下宿屋に息子を預けた母親はベッドを子供のために持ち込んだ。下宿屋の食事は、①スープが出る。それに、②母親が子に持たせた食材を料理してもらって食べた。この程度のことをやってもらって、ひと月に、1.5フラン払った。しかし、一年につき、①バター１ポンド、②馬車一台分の薪（たきぎ）を母親は下宿屋に提供する。この下宿屋には、このような子弟男女20人の学童がいた。

1881：教師の給料はいくらかずつでも良くなっていった。が、決められた給料水準を維持することは容易なことではなかった。初任給は次のようだった。

西暦	給料の年額(フラン)
1881	700
1891	800
1897-1905	900
1905	1,100

（最高給は、各年とも、ここに記してある額の倍の年収の人もいたといいます）

19世紀から20世紀への変わり目辺りでは、田舎の教師の手取り額は、炭鉱労働者とおなじくらいで、パリの洗濯女あるいは織物工よりは多かった、という。しかも、教師は「みなりをきちんと」しなければならなかったし、少なくとも外見は国家公務員とか、志を高くもつ紳士にふさわしい生活を保たねばならなかった。

1890年代：村の学校の教師は、たいていの村では行政の仕事をするばかりでなく、時には地方新聞の特派員としての仕事もやることがあった。そうすれば、お金も入るし、名前も売れようというもの。そういうところから、「若者に与える教師の影響力によって、村の政治を変えた」という見方もあった。

4．1．9　教育の実態(8)：師範学校の教師・学生

［Weber 215/307/315-7］

1864：(1)フランス南西部ドルドーニュ県［24］・パリ南西部ウール＝エ＝ロアール県［28］・フランス南東部サヴォワ地方／師範学校の学生は労働者階級、それも小さな農家の出身だった。親が息子を師範学校に入れた理由は、主に兵役逃れ。
(2)フランス南西部ロット＝エ＝ガロンヌ県[47]／師範学校の学生は田舎の貧しい家庭から集められた。
(3)ノルマンディー地方カルヴァドス県[14]／師範学校の学生はフランス語の発音が不正確で、自分の方言の発音の癖が抜けなかった。

1872：(1)フランス中南部中央山地南部ロゼール県［48］のマンドMendeにある師範学校／ここの学生は肝心のフランス標準語に弱かった。「第一の理由は、入学時すでにフランス標準語の知識が不十分だったから」。それから10年たっても、ここの師範学校の学生は依然として、家に帰れば、ロゼール方言を話していた。こんな状況だったからフランス標準語の授業といえば「ただ文法問題を解くだけの授業だった」。
(2)地中海に面した南仏ガール県[30]のニームNimesの学校視察官報告／「師範学校の学生を育てた言葉――ニーム方言――をこれまで使っていた長い期間と、師範学校で過ごす短い期間の違いを考えれば、師範学校でのフランス標準語による授業はかなり困難だ。

1875：フランス中部オーヴェルニュAuvergne地方カンタル県［15］／県内のオーリヤックAurillacにある師範学校では「フランス標準語教育は、この時期になってもまだ方言が立ちはだかっていることが最大の難題」。その2年後の調査でも「師範学校の学生の大半にとって、フランス標準語は殆ど外国語」だった。

1876：(1)南仏プロヴァンスProvence地方ヴォークリューズ県［84］／アヴィニョンAvignonの師範学校の先生自身が、フランス標準語の理解に欠けていた。

(2)フランス南西部のガスコーニュGascogne湾に面しているランド県［40］／師範学校生もその指導者も、フランス標準語の習得は危なっかしいものだった。「師範学校の先生も師範学校生同様フランス標準語が読めない人が多かった」。

1880年代：師範学校の充実に本腰を入れる気運が興った／①フランス標準語（＝パリ語）教育の充実、②フランスの歴史と地理を授業に導入、に重点をおき、これまでの師範学校の性格全体が変わり始めた。「師範学校はもはや過去の暗い学校ではない。活き活きと活動する」。

1881：フランス中央山地南西部アヴェロン県［12］／師範学校の先生には自分の生まれた県から出たことのない、土地の人が多かった。だから、自分の方言の訛りや癖がなかなか抜けず、結局それをそのまま学生に教えることになる。

1882：フランス中西部ドウー＝セーヴル県［79］パルトゥネParthenayの師範学校／この師範学校の様子は、「物質的にも精神的にも、気の毒で、粗末な、みすぼらしいゴミ捨て場。知性的なものは皆無。何もかも沈滞。それが貧困家庭の若い農民を貧しい年老いた教師にしてしまうのだ」。

1880年代中期：この時期の公立小学校の教師は七月王政時代（1830-48）の師範学校出身が多いはず。彼らの訓練と質は、だんだんと良くなっていった。

4．1．10 教育の実態(9)：教育の意義と認識

［Weber 85-6/315-7/328/331］

1870→：第三共和制になると、下級公務員でも学校の卒業証明書が必要になった。その結果、どんなに下級公務員でも、かれらは優越感をもち始めました。そういう感情は今でも彼らに感じられる。

1880年代：学校の教師も教師としての誇りを持ち、また周囲からもそう期待されるようになるべきだ、という動きがおこってきた。教師は、服装においても、行動においても、おのずと農民たちとは違うとみられるようになった。

→1880年代：小学校の教師はほとんど例外なく、もともとは単なるふつうの農家の息子だった。そして、誰でも思うように、今の自分の生活状況から逃れたい、あるいは兵役から逃れたいと思っていた。しかし、それまで彼らが何の価値も認めていなかった「教育」さえ身につければ、それは夢ではなくなる、と考え、勉強に励み、小学校の教師になったのだ。このようにして、彼らの「教育」にたいする態度が徐々に変わっていった。

1889：フランス北東部ヴォージュ県［88］の教師レポート／「農民は以前から較べると教育をうけている人が多い。それもあって、もっとお金を稼ごうと思えば、今までのやり方を考え直さなければならないことを知っている」

1894：(1)フランス南東部プロヴァンス低地地方／この地方の村の子どもは、一世代前までは殆ど文盲だったが、今ではたいてい、学校に通っている。中には、通学時間が歩いて1時間半もかかる所から通っている児童もいる。

(2)フランス南西部／夜になると、燃え残りの灯火で学校の宿題をしている子どもの勉強姿がみられる。

4．2　兵役

4．2．1　国民の兵役感情（兵役忌避から受諾へ）

［Weber 293/295-7/300/321］

1825：フランス南部地中海沿岸の中央、エロー［34］県では、兵役の呼びかけに対してほとんど反応がなかった。

1827：フランス中央部の中央山地の北部に位置するピュイ＝ド＝ドーム［63］県では割り当てられた徴募兵の人数をなんとかしてやっと満たす、という状態だった。軍側からすれば、兵士になるほうが「貧しい小屋で暮らすよりはよほどいい生活であろうに」と考えると不思議でならなかった。

1832：フランス中央部オーヴェルニュ地方のカンタル［15］県では、兵役に対するむきだしの嫌悪感が感じられた。

1839：フランス中部、中央山地の北東部にあるロ

アール［42］県では、兵役を非常に嫌がった。すこしでも資産のある農夫は金で代理人をさがし、兵役を逃れた。

1840：スペイン国境地帯にいるフランス側にいるバスク人は、兵役逃れのためにスペイン側に逃げ込んだ。

1856—7：フランス側のピレネー山脈中部に位置し、スペイン国境と接するアリエージュ［09］県で、兵役を逃れるために、自分の手足を自分で切り取ったりして、兵舎から脱走したり、贈賄を試みたりする傾向が強く見られた。つまり、兵役を強く嫌う傾向があった。

1859：(1)フランス中部、パリ盆地南部ロアール＝エ＝シェール［41］県では、兵役忌避の風潮が続き、兵役を逃れるために、自分の手足を自分で切り取る俗習が続いた。

(2)フランス中部、中央山地北東部のフォレForez地方東側ローヌ［69］県でも、兵役忌避があった。

1860：(1)息子を兵役に取られ、それだけ人手がなくなることは、その家族あるいは教区にとって大きな痛手だった。例えば、ブルターニュBretagne地方の最西端フィニステール［29］県のある村／村長がある農家の息子の兵役免除を願いでた。その理由はこうだった：「もし息子が再び兵役につけば、父親は農場を手放さざるをえないから」。

(2)同じブルターニュ半島の最東端イール＝エ＝ヴィレーヌ［35］県では、兵役は国が強要するもの、例えば、一種の窃盗、と見られていた。軍隊は徴兵を連想するので、一般からは歓迎されなかった。

1860年代：(1)兵役に代理人をたてることが許されていた。その際、代理人側に支払う金額は、全国で年間７千万金フランに達した。代理人をたてる率は地域によって異なる。

地　　域	代理人をたてる率
パリ北西ウール[27]県/フランス南西部	
ロット＝エ＝ガロンヌ[47]県/南仏エロー[34]県	全召集兵の40%以上
アルザスAlsace地方/ブルターニュBretagne地方/	全召集兵の８％
コルシカCorse島	全召集兵の２％

(2)南仏アヴェロン［12］県・フランス南西部オート＝ガロンヌ［31］県／子供は6-7才になるともう仕事につかされた。鋤（すき）で畑を耕したり、犂（すき）を引く牛馬を先導したりした。だから、重労働で子供の成長を妨げる、と徴兵委員会は注意した。

1870年代：フランス中南部中央山地北方ブルボネBourbonnais地方の小さな村／このむらでは、以前から、「男の新生児は殆どみな女性として届け出ます」。これは、兵役を逃れる巧妙な手口だ。1870年代にはまだ残っていたしきたりでした。兵役の５年間は、農場や田畑に不可欠な耕作を不可能にし、他人に頼む農家が多くなるから、その労働の手間賃を引き上げ、兵役の息子の結婚を遅らせ、若い者の土着を妨げる期間だった。

1872：フランス東部サヴォアSavoie地方では、移住が兵役を逃れるためによく使われる手だった。1872年末には、新制度の５年間兵役に関する法令が出来た後、移住に必要なパスポートを申請した50人の青年のうち1/3は、徴兵の対象年齢の層だった。しばらくして、徴兵の対象年齢15才から20才の青年たちは、正式な手続きをして移住した。しかし、無届けでそっと移住して行った人も沢山いた。

1873：バスクBasque地方では兵役に対する抵抗が強かった。

1874：フランス南西部ランド［40］県（２番目に大きな県）の兵役に対する態度は「せいぜい無関心」。

1876：ブルターニュBretagne地方のイール＝エ＝ヴィレーヌ［35］県の兵役に対する態度は「せいぜい無関心」。

1877：フランス南西部オート＝ガロンヌ［31］県では、軍人としての意識が不充分で、兵役逃れの移住が盛んに行われた。

1878：フランス北西部サルト［72］県の兵役制に対する庶民の感情は「できるだけ避けたい」。

1889：軍隊は田舎の人にとっては、悪魔のように思われた。兵士は、同じ村の人からさえも、怖がられ、怪しがられもした。

1890年代：軍隊に対する意識は、「他人のもの」から「自分たちのもの」へと変わっていた。軍隊と国民とのあいだの悪感情は、学校と兵舎で教えられる国家・国民意識によって変わって行った。

4．2．2　兵役と教育

［Weber 288/292-4/297/299/308-9/311］

1818：ナポレオン１世の後をルイ18世（1755-1824/在位1814-24）が受けた。そのもとでグヴィヨ

ン＝サン＝シール Laurent Gouvion = Saint = Cyr (1764-1830) は、国防相として、主として、軍の再編成と徴兵制の立法案に力を注いだ。兵役年数は、下記のようにその後変化があった。

1818-23... 6年
1824-54... 8
1855-68... 7
1869-89... 5

1850年代後半まで、すくなくとも全体の1/4以上が本人の代理人として勤めた。経済的に裕福な家庭の子弟に兵役代理人を立てる習慣があった。初めのうちは、その代理人を探すのは個人的に行なっていたが、1820年頃には、保険会社がその仕事を代行。

1829：フランス中央部のコレーズ［19］県における徴収兵のうち読み書きができる人の割合の推移／下記の統計参照。

	徴収兵の識字率(%／コレーズ県)
1829	14.3
1855	31.9
1860	34.8
1865	41
1868	50
1875	62

1830年代初期：フランス中央部・南部の54県の平均非識字率は、60-80%だった。

1847—99：フランス西部ブルターニュ地方の徴集兵は、フランス標準語で命令されても、内容が理解できなかった。ブルターニュ地方の徴集兵は、19世紀末になってもまだ方言を使っていた。

1868—1889：1868年の募兵方式は、プロシャアの方式を一部真似たものだった。
それは2系列に分かれていた。つまり①5年間の現役服務の後4年間は予備兵、②国民遊撃隊の2系列。この方式は、短期間（1868-70/71の間に）で廃止された。その後、1872－1889にかけて、分遣隊はまだ2系列に分かれていた。それは①「運の良かった」人は1年の服務、②それ以外の人は、5年の服務。

1870年代：革命軍・帝国軍隊の退役軍人といった昔風の兵士がブルターニュBretagne地方にいる、とよく言われた。それに共通した特徴といえば、絶対にフランス標準語を学ぼうとしない、あるいは、「フランス標準語の使用を潔（いさぎよ）しとしない偏見から逃れられず」フランス語を忘れ去った人たちだった。

1873：第三共和国時代の最初の軍法改正が1873年1月1日付けで公布され、それまでの兵役を本人以外の人に代わって勤めてもらうことができる、という法令は廃止された。それには徴兵5年制が含まれていた。同時に、特に教育をうけている層にいろいろな優遇措置を用意していた。完全な免除から、勤務期間中の希望する1年間1,500フランを支払えば勤務が免除される一部期間免除まで。

1875：軍内の試験の手引きには、次のようにある。母国語とは——親、特に母親の話すことば。また同胞が話すことば。さらには、われわれと同じ「国」に住んでいる人々が話すことば。我々の母国語は、フランス標準語である。

1881：(1)フランス中南部オーヴェルニュAuvergne地方ピュイ＝ド＝ドーム［63］県のアンベールAmbert地域／この地域は学校の設備は悪かったが、徴集兵のいわゆる文盲率はひじょうに低かった。学校視察官によれば、県外に移住したことのある人は、手紙を出すのに文字が書けることの有り難みがよく分かった。だから、自分の子供たちには、親よりはもっと読み書きが出来るようにさせたいと思った。教育は、貧乏な村の生活から抜け出られる切符でもあり、都会に行ける通行手形でもあった。
(2)初等教育の成果が最良の地域と最悪の地域との境界に線を引くとすれば、サン＝マロSaint-Malo（ブルターニュ半島の北岸）とジュネーヴGeneve（スイス・レマン湖南西端）を結ぶ線。その境界線の南側の16県（人口650万）は1881年の徴集兵の非識字率が20%以上。これら県のうち9県の徴集兵における非識字率は最高が41.3%（モルビアン［56］県）で、最低が26.1%（コレーズ［19］県）だった【著者ヴェーバーWeberは、この非識字率の数字は実際はもっと高いと付け加えている】。ただし、この統計については次の付帯条件がある——①上の数字には、徴集兵以外の男性は含まない。②女性も含まない。女性は男性よりも非識字率がずっと高い。③上で触れたサン＝マロとジュネーヴを結ぶ線に南側に収まる地域はほぼ次のとおり：ブルターニュBretagne地方の奥部／中央部シェール［18］県から南西部ドルドーニュ［24］県・中央山地南東アルデーシュ［07］

県にいたるフランス中央部／ピレネー山脈地帯。都会と田舎の別はしなかった。非識字率は田舎のほうがずっと高い。地図4参照。

1889：(1)①兵役期間が3年に短縮された。②1,500フラン払えば兵役が免除される制度が廃止。③それ以前に、兵役が特別免除されていた人々（特に、学生、教師、僧、神学生、母子家庭あるいは大家族の長男）は、軍役1年が課せられた。

1893：フランス中部オーヴェルニュAuvergne地方カンタル県［15］の方言は、1893年迄には衰退に向かっていた。これは、明らかに「今では男なら誰もが（兵隊に）行く」から。

4．2．3　兵役が育む愛国心

［Weber 298-9/300/302/332］

1847：フランス中部オート＝ヴィエンヌ［87］県では、兵役を終えて故郷に帰ってきた若者は、田舎の友達と比べてもあか抜けていたし、田舎ではまったく耳にしないフランス標準語を口にしたり、時には北フランス風の男っぽいしぐさをしたりする。

1860年代：兵士一人当たりの一日の平均食料は1.4kgであるのに対して、国民一人当たりの一日の平均食料は1.2kg。20－27才の一般青年男子と同年代の兵士の死亡率と罹患率（病気にかかる割合）とを比較すると下記のようだった。

	一般青年男子(20-27才)	兵士(20－27才)
死亡率(千人につき)	11	10
罹患率(千人につき)	43	41

1860—70年代：フランス国民としての一体感・連帯感を目指すものの、なかなか実現しないのは、80年前（フランス革命時）と変わらなかった。

1870：軍隊・募兵・兵役といったものが、国家的な制度として国民に認知され、受け入れられるようになったのは、1870年以降のことだった【普仏戦争がきっかけ】。

1870年代：(1)軍食糧経理部将校の報告書によれば、兵士の一日の食事は次のようなものだった。①半ポンド以上の肉、②半ポンドのパン（普通は黒パンだが、黒パンを嫌がる人もいたから、しばしば白パン）、③芋を含む、2ポンドくらいの野菜、④特別な日には、コーヒー、ワイン、砂糖。

(2)連隊の武勲を祝う式典は1870年代に始まった。その際、連隊の軍旗がテーブルの中央に置かれた。こうして、彼らの視野は、一番狭い「お国自慢」からもう少し広い「連隊への忠誠」へと変化していった。それはさらに、「フランス国への忠誠」へとつながって行くはずのものだった。

1880：「フランス標準語を読みも、書きも、話も出来ない若いブルトン人（フランス北西部ブルターニュBretagne地方）も軍隊にはいると、そこで礼儀作法を教わり、すぐにあか抜けしてくる。自分の故郷であるブルターニュに対する偏見もなくなり、郷里に帰るころには友達にフランス風を吹かすほど、自分がフランス風になっている。

1887－96：フランス北東部フランシュ＝コンテFranche-Comté地方ドゥー［25］県出身の徴集兵が除隊後、再びドゥー県に帰って来たか、それともドゥー県以外の県で職についたか、についての統計がある。

西暦	徴集兵の数	除隊後同県帰郷	西暦	徴集兵の数	除隊後同県帰郷
1887	6	3	1892	5	2
88	5	2	93	6	3
89	4	2	94	8	4
90	5	4	95	4	2
91	4	1	96	4	4
			合計	51	27

4．3　移動

4．3．1　道路

［Weber 196-9/200-4/208/211/218］

1824：国道についての統計——全長とそのうち実際に使える部分の割合

	使用可能率(%)	全長(km)
1824	42-44	33,536
1830	70	34,512
1845	100	36,000
1918	100	38,000

1830年代：東フランス中央部ポアティエPoitiers（現在ヴィエンヌ県［86］の県庁所在地）から東南に直線で約304km離れたイサンジョーYssingeaux（中央山地Massif centralの東部の現在、オート＝ロアール県［43］内の郡庁所在地）に向かって歩きはじめた人がいた。若き政治家オスマンGeorges Eugene Haussmann (1809-91) だった。彼によれば

まる6日をかけて、340kmの所にあるル・ピュイLe Puy（現在オート＝ロアール県［43］の県庁所在地）まで行った。そして翌日、つまり7日目、残る28km歩いて目指すイサンジョーに到着した。つまり、合計368kmを7日間で歩いた計算になる。

1836－90年代：道路建設の進捗状況はかんばしくなかった。フランス中部のコレーズ［19］県では、1836年に計画されたものが1890年代になっても未だ完成していない地域が多かった。すでに開通していた道路でも、その実情は「惨憺たる」ものだった。

1837－：フランス西部の8県は国道整備に力をいれた。その主眼点は、国道を延長するよりも、①現存の道で役をなさない部分を改修し、道路の役割を果たすようにする、②しっかりした橋を架ける、③どのような悪天候でも軍隊の移動に耐えうるように補強する、ことだった。つまり、「量より質」の政策。フランス西部の8県とは次のとおり。地図4（次頁）参照。

(1)サルトSarthe県［72］
(2)マイエンヌMayenne県［53］
(3)イール＝エ＝ヴィレーヌIlle-et-Vilaine県［35］
(4)メーヌ＝エ＝ロアールMaine-et-Loire県［49］
(5)現ロアール＝アトランティックLoire-Atlantique（=旧Loire-Inferieure）県［44］
(6)ヴァンデVendée県［85］
(7)ドウー＝セーヴルDeux-Sevres県［79］
(8)現シャラント＝マリティムCharente-Maritime（＝旧Charente-Inferieure）県［17］

1838：フランス最西端フィニステール県［29］の小学校の視察官が、同県の大きな町カンペールに急いで行くよう要請された。同県の北東の端から南西端に縦断する直線で40マイルほど離れたところだった。そこへ行くのに馬で、3日と半日もかかった。

1840：フランス中南部のオート＝ヴィエンヌ県［87］ベラックBellac郡の小学校視察官は、徒歩がすべてであったから、道路の実情が一番よく分かった。報告書の中で、道路の役目を殆ど果たしていないものまで「通行可能」のランクに入れられている、と述べている。

1848：イギリス海峡に面したノルマンディ地方の県の一つカルヴァドス県［14］のある町議会で、失業者に仕事を与えることを決議した。その内容は、いわゆる公共事業で、地方貴族の大邸宅に国道へ通じる道をつけることだった。これが、1876年以後、小さな村にも、農場にも国道へ通じる道路が付けられることになっていく。

1850：(1)フランス中西部ドウー＝セーヴル県［79］では、まだ道とは言っても冬はもちろん、夏でも使い物にはならなかった。道路の目に見える改修は1881年以降だった。
(2)フランス南西部オート＝ガロンヌ県［31］のトウルーズToulouseから大西洋に面するジロンド県［33］のボルドーBordeauxにいたるまでのガロンヌ河渓谷では、19世紀中頃になって初めて橋がかかった。

1850－1900：フランス中部オーヴェルニューAuvergne地方のカンタル県［15］では、1860年以降道路が増えた。しかし、量的にも質的にも向上していったのは、1880－1900にかけてであった。

西暦	国道以外の道路数（カンタル県［15］）
1850	16
1870	103
1899	130

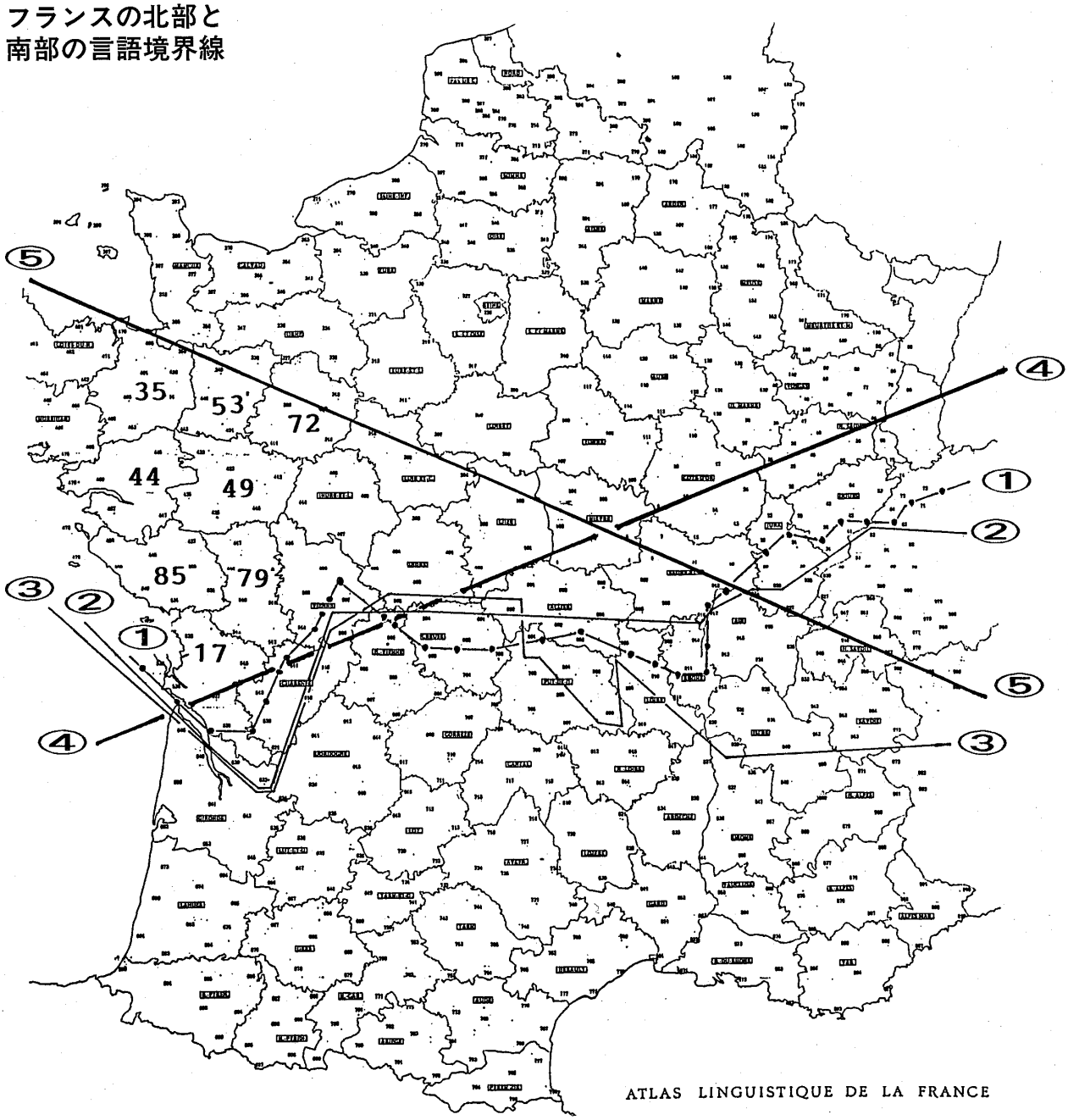
1852－70（第2帝制）：道路建設予算は、下記のように1854年から7年間、他の需要費のしわ寄せで圧縮せざるをえなかった。

	道路予算（単位百万フラン）
1853	2.2 million francs
1854-60	1.6

1855－74：フランス中部オーヴェルニュAuvergne地方に位置するカンタル県［15］内のオーリヤックAurillac・モーリヤックMauriac間の主要道路が、管理が悪く、切れ切れになっていた。この実態を嘆いて知事は「旅行者にとって、恐ろしい道だ。交通機関は通れない」と苦情を持ち込んだ。それに応えて、修理に着手したのは、やっと1864になってから。そして再びなんとか車が通れるようになったのは1867年のことだった。しかし、修理が完成したのは1874年。

1857：フランス中南部の中央山地南部に位置するアルデーシュ県［07］では、洪水によって、あるいは単に悪天候になっただけで、道路や孤立している村が流される状態だった。そうなるとラバも通行で

地図 4
フランスの北部と南部の言語境界線



地図 4 の凡例

① J.Gillieron & M.Roques(1912) 曜日名の境界線／北側は -di型；南側は di-型
②・③ G.I.Ascoli (1874)の北部方言と南部方言の境界線／G.Jochnowitz (1973:19)
④ J.Gillieron & J.Mongin (1905) 「鋸を挽く」serrare 類がかつて分布していた北限線（「ジロンド河と北東部ヴォージュVosges山脈を結ぶ線」という記述に従って、実際には曲線で示すところ、簡略化するため直線で示した。
⑤サン・マロ⟷ジュネーヴ（スイス）を結ぶ線／本文 4.2.2:1881(2)を参照。
数字 17, 35, 44, 49, 53, 72, 79, 85 ／県番号；地図 3 の凡例参照。

要　点

南・北方言の境界線はかつて、地図の①・②・③・④よりもっと北にあったことが推定できる。そのかつての境界線を地図の①・②・③・④にまで圧し下げた力のひとつに標準語の南下を導いた、とくに地図で示した 8 県の道路整備（本文 4.3.1:1837)があったことを窺わせる。

きなくなり、人は歩くしかない。

1858：フランス中東部のブルゴーニュBourgogne地方の西側に位置するニエーヴル県[58]の公文書には、1858年の道路報告書がある。それを読むと、内容の殆どが「道路計画あるいは、その要望」だった。

1860年代：フランス南東部中央山地南東部に位置するアルデーシュ県［07］内の村の農民は、背中に栗の実を背負って、山の悪路を4,5時間歩いて町の市場まで運んだ。男性なら50-60kgを、女性ならその半分位の重さだった。1860年頃までの話。

1865：フランス中東部のブルゴーニュBourgogne地方の北東部に位置するコート＝ドール県［21]のディジョンDijon大学文学部部長Cl.-J.ティソTissotが1865年当時サヴォアSavoie地方の荒野でいろいろ人の口にのぼる「祟（たた）り」の最良の治療法は、オート＝サヴォア県［74］のトノンThononとモルジンMorzineを結ぶ道路の残り16kmを完成させることだ見解を述べた。そうすれば、道路によって運ばれる品物や旅人といっしょに、世人の偏見・風説も正しい方向に変わって行くだろう、というわけだ。

1867：(1)1867年８月17日公布された法令は、市町村道の充実を急がせるもので、各地方自治体からは歓迎された。しかし、この時期に、このような法令が出ること自体、道路整備の遅れを示すものだ。
(2)フランス南西部ロット＝エ＝ガロンヌ県［47］アジャンAgen市の検事の発言。「文明を運ぶ大きな自動車」。道路・鉄道のことをそう表現した。

1870：地域道路の整備は1870年頃には、国道の総延長の10倍に達した。

1870年代：フランス中南部の中央山地北東のフォレForez地方や同中央山地東のヴィヴァレVivarais山地の多くの町や村に初めて道路らしい道路が出来たのは1870年代になってからだった。

1870—90：フランス西部ブルターニュBretagne地方のフィニステール県［29］の孤立も、1870年以降道路が整備されると同時に解消された。この地域の道路網が完成したのは、それから20年後の1890年頃だった。

1870—：フランス全土にわたる膨大な道路網の建設は、1870年から始まる第三共和制時代になってやっと始動した。

1875：フランス中南部中央山地北東部のロシュ＝アン＝フォレRoche-en-Forezで車が通れる道路ができたのは1875年のことだった。

1881：(1)フランス中南部中央山地西南部ロット県［46］の学校の教師は、道路が通じたのを大喜びした。道路は繁栄と「文明」をもたらすものですから、と。
(2)地方の田舎道の敷設が「公共の福祉に一致すると認められ」、敷設を促進させる法令ができた。

1881—1929：フランス西部の大西洋を臨むヴァンデ県[85]の国道を除く地方道路の76％が、1881-1929に建設された。

1896：中央山地Massif central北部ピュイ＝ド＝ドーム県[63]／馬車などは勿論のこと、人間が歩いてさえも通ることのできない状態の道があり、その上、４年間そのまま放置！学校なども悲鳴をあげて「恐ろしくも悲惨なことよ」。

4.3.2　鉄道

［Weber 196/203/205-6/209-11/216-7/284/309]

1830年代：道路を作るにも、フランス最大の森林地帯を抱えるランド県［40］から必要な資材を運ぶ交通機関が1830年代にはなかった。一時はラクダを使って運ぶ方法も考えられたが、結局失敗。鉄道が敷設されるのは、さらに20年待たねばならなかった。

敷設地域	鉄道開通年
ボルドーBordeaux＝バヨンヌBayonne	1855
その他の内陸鉄道	1875-1900

ボルドーは、ジロンド県［33］の県庁所在地。バヨンヌは現在ピレネー＝アトランティック県［64］の貿易港。従って、ボルドー ⟷ バヨンヌは、フランス最大の森林地帯を突き抜けて走っている。材木の積み出しがいかに楽になったかが良く分かる。

1840—50年代：鉄道がパリを中心にして、放射状に延長された時代。その恩恵を得られない地域の生活は旧態依然だった。

1846：フランスのノール県［59］リール市の南29kmに位置するドウーエDouaiの鉄道駅が開業したのは1846年。

1856：ピレネーPyrénées山脈に発しフランス南西部に走るガロンヌGaronne河岸のトゥールーズToulouse市とボルドーBordeaux市を結ぶ鉄道が敷

設されても、ガロンヌ河の河川交通のほうが鉄道よりも頻繁に利用された。これは例外で、一般的には、河川交通は徐々に鉄道に交代していった。

1860：アヴェロン県［12］の都ロデスRodez（中央山地南西部）の人里離れた地域が他の地方に移住しはじめたのは1840年代だった。ところが1860年にロデスまで鉄道が延長されると、ますます移住していく人が増えた。

1861：ピレネー山脈中部のスペイン国境沿いのアリエージュ県［09］のサン＝ジロンSaint-Gironsのような小さな町に、鉄道の敷設がパリで認可されたという報が入った1861年、その時はもう町中がベルを鳴らしたり、砲火を打ち上げたり、自然にパレードの列ができたり、大騒ぎだった。町の人たちが、鉄道が走ることがどういう変化をもたらすかよく知っていた。その後、サン＝ジロン駅ができたのは、1866年だった。

1861－80年代：フランス南東部中央山地南東部に位置するアルデーシュ県［07］でのこと／1861年に始まった道路敷設工事も、1880年代になっても、わずか数キロの距離しか進んでいなかった。

1861－1922：鉄道関係の被雇用者の数は年々増えてきた。それは鉄道の敷設が伸長されていったことを裏付けるものだ。

西暦	鉄道関係の被雇用者数
1861	86,300.
1866	113,000.
1876	172,000.
1881	222,800.
1907	308,000.
1913	355,600.
1922	511,000.

1862：鉄道の敷設が延長されていくと、それまでは品余りに悩んだワインを鉄道を活用して、売りさばくことができた。地中海に面し、スペイン国境にも近いオード県［11］ナルボンヌNarbonneでも、またフランス中南部のオーヴェルニュAuvergne地方でもそうだった。後者の場合、煉瓦や石などを接合する際に用いるモルタルを水で練る時、水代わりにワインを使ったほど、ワインの品余りに手を焼いていた。

1864：フランス南東部のイゼール県［38］のグルノーブルGrenobleから北側で隣接するドローム県［26］のヴァランスValenceとの間に鉄道が敷設された年、イゼール県のモレットMorette村の農民は今までのワイン製造は、フランス南部のおいしくて、安いワインに任せ、その代わり、自分たちは、クルミの実を栽培し始めた。それを新設の鉄道で運べば、ワインよりは、儲かるからだ。

1866－1936：いわゆるPLM（パリ－リヨン－地中海線）鉄道の東西15km以内に鉄道駅のない町や村は人口が合計でほぼ1/4減少した。いっぽう、鉄道の東西15km以内に鉄道駅のある町や村は、人口が合計1,645,373人増加した。

1877－：大きな都市とパリとは鉄道で結ばれたが、大きな都市相互が鉄道で結ばれ始めたのは1877年以後になってのこと。例えば、北仏ピカルディーPicardie地方オアーズ県［26］のクレルモンClermontが中央山地北東ローヌ県［69］のリヨンLyonと中部リムーザンLimousin地方コレーズ県［19］のテュールTulleに鉄道で結ばれた。

1879：フレシネCharles Louis de Saulces de Freycinet（1828-1923）〔技師・政治家・公共事業相・外相・首相。港湾、鉄道の整備〕／(1)同時代の人が記しているところによれば「フレシネ計画は、フランス第三共和制を賛美するために打ち上げられた花火のように登場した」。1877年5月16日の政変後、1879年マクマオンMacMahon大統領の辞任直後に発表されたもの。この計画にうたってあるのは次の3項だった。①新しい政府が不況の結果できたものでは決してない、②政府の政策を津々浦々に浸透させる、③建設計画による恩恵と鉄道敷設行政によって国民の連帯感を強める。

(2)フレシネ計画／①鉄道建設に費やす何百万フランは、学校設立のための莫大な金額に匹敵するもの。つまり学校17,320校の創設、5,428校の拡張、8,381校の修理、これらの費用に匹敵するものだった。②1878年に設立された学校基金で3億1100万フランの補助金、それに、2億3100万の7年公債が行政執行された。③公共教育の予算は次の通り。

西暦	額(フラン)
1878.....	53,640,714
1885.....	133,671,671

(3)フレシネ計画は、10年間で60億フランの予算。そ

の半分以上が鉄道新設のための費用だった。これが、1879年時点の計画だった。

1884：次の水路が廃止され、鉄道にその任務が受け継がれた／①フランス南西部タルンTarn河のタルン＝エ＝ガロンヌ県［82］モントーバンMontaubanとオート＝ガロンヌ県［31］ガイヤックGaillacとの間。②ヴェゼールVezere河のリムーザン地方低地とボルドー地方Bordelaisとの間。

1885—99—1903：ブルターニュBretagne半島の一番東側の県イール＝エ＝ヴィレーヌ県［35］のアマンリAmanlisという小さな町は、鉄道の軌道が狭軌軌道の計画に反対（1885）。その後、「反対」の決意を撤回(1899)。その後、実現したのはやっと1903年になってから。

1890年代：鉄道視察官の記録／鉄道線路から10マイル離れている地域と、鉄道線路から10マイル未満の範囲内にある地域について、鉄道の利用頻度を較べると、前者は後者の1/10以下だった。

1890—1914：ブルターニュBretagne地方には、狭軌鉄道が導入され、山間部を中心とする農業地域としての顔も変化してきた。

1899：次の水路が廃止され、鉄道にその任務が受け継がれた／ドロ河のフランス南西部ジロンド県［33］ボルドーBordeauxとエメEymetとの間。

1901：アルプス山脈西端のボージュBauges山地では、最後の製釘（せいてい）工場が閉鎖になったのがこの年。同じ年、サヴォアSavoie地方のアルプス山中アヌシーAnnecyと同地方のアルベール・ヴィルAlbertvilleとの間に鉄道が開設。

4．3．3　河川交通

［Weber 211］

1856：ピレネーPyrénées山脈に発しフランス南西部に走るガロンヌGaronne河岸のトウールーズToulouse市とボルドーBordeaux市を結ぶ鉄道が敷設されてもガロンヌ河の河川交通のほうが鉄道よりも頻繁に利用された。これは例外で、一般的には、河川交通は徐々に鉄道に代わられていった。

1860—70：1860年代にフランス南西部のタルン河を往復していた船の数は、その10年後にはわずかその1/10しか残らなかった。

1884：次の水路が廃止され、鉄道にその任務が受け継がれた／①フランス南西部タルンTarn河のタルン＝エ＝ガロンヌ県［82］モントーバンMontaubanとオート＝ガロン県［31］ガイヤックGaillacとの間。②ヴェゼールVezere河のリムーザン地方低地とボルドー地方Bordelaisとの間。

1895：ピレネー山脈東部に源を発し地中海に注ぐオード河には筏（いかだ）や丸木が川下に流されていた。ピレネー山脈の材木をラングドックLanguedoc地方南西部リムーLimouxやピレネー山脈東部北側カルカソンヌCarcassonneの町まで運ぶ。

1899：次の水路が廃止され、鉄道にその任務が受け継がれた／ドロ河のフランス南西部ジロンド県［33］ボルドーBordeauxとエメEymetとの間。

1900：(1)フランス中央山地東部からパリ盆地南部を流れ、ロアール＝アトランティック［44］県を通り、大西洋に注ぐロアール河の船頭さんの水先案内の技術は、古い教会の窓を飾るステンド・ガラスの技術同様すでに見られなくなった。「後世のひとは、そんなものがあったんですかと言うだろう」。
(2)フランス南西部内陸部ドルドーニュ県［24］を通り抜け、ガロンヌ河に注ぐドルドーニュ河で働く船は、まだ94杯あった。それでもって、16,049トンの積荷（チーズ、石炭、木炭、薪、ワインの貯蔵樽用の板材、一般の樽板）をペリゴールPerigord地方からボルドーBordeaux地方へ運んだ。かつては、秋雨の後などは川面が船で一杯だった。今はとてもそれどころではない。河川運搬も幕引きの時期を迎えていた。

4．3．4　移動：旅行と移住

［Weber 199/278-81/284-9/290/328］

1840年代：スペイン国境地帯のアリエージュ県［09］でも、伝統的な鉱業、鉄鋼業、製炭業も廃り、生活が困窮した。こうして、いわゆる季節労働者の出現が年中行事のようになった。

1845：フランス中部オーヴェルニュAuvergne地方南部カンタル県［15］では必修外国語としてスペイン語を選ぶ学校が圧倒的に多かった。逆にスペインの子供たちはカンタル県の学校に送られ、フランス語を学んだ。19世紀中葉までは、家族が一人もスペインにいない村は、オーリャックAurillac市には皆無だった。1845年にオーリャック市議会では、スペイン語を話す議員の席を設けるまでになった。／またモーリヤックMauriac郡からの報告によれば、

一年の内、何ヵ月もスペインで過ごす人や、一年の内、何回も仕事でスペインに出張しなければならない人が何百人もいた。

1851－1921：フランス南部ラングドック地方で地中海に面したエロー県［34］は、ほとんど県民が当県で生まれた人で占められていた。しかし、徐々に県外の人が流入してきた。

	エロー県人口における県外の人が占める率
1851	0.5 %
1896	2.46
1901	3.5
1921	10.7

1852：南フランスで地中海に面したブーシュ＝デュ＝ローヌ県［13］のアルルArlesのような大きな町では毎年、収穫期が近づくと、ブローカーを派遣して、人手を確保した。その数は多く、1852年の農業白書によれば、収穫だけのために、90万人近くの季節労働者が動員された。

1861－1918：フランス全体で、自分が生まれた県から出て、他の県で生活している人の率は、だんだん高くなっていった。

西暦	出生県から他県に移動している率(%)
1861	11.3
1881	15
1901	19.6
1918	25

1866：フランス中南部の中央山地北部ピュイ＝ド＝ドーム県［63］の地主は、労働者が時間短縮を要求して困る、とこぼしていた。その結果、仕事の開始は、それまで午前4時だったのが午前5時になり、昼休みはそれまで30分だったのが丸々1時間になった。そういう要求は、他県への移住労働者だった人々が、帰県して、向こうでの職場の様子を仲間に吹き込んだ結果に違いない、と地主は言っていた。

1871：フランス中央部中央山地北部ピュイ＝ド＝ドーム県［63］では、この近辺の大都市リヨンLyonsへ出稼ぎに行き、帰って来た「リヨン帰り」の若者は、あの暴動の町、リヨンでこの若者たちが見聞した政治について、田舎の仲間に吹聴するのだった。

1872：フランス中部リムーザンLimousin地方のコレーズ県［19］の移住の登録者数が一番多い。と同時に識字率もいつも一番高い。そして、同じリムーザンLimousin地方のオート＝ヴィエンヌ県［87］では平均して、3人に一人の割合でしか学校の入学登録をしていないけれども、ベラックBellac村では「ほとんどすべての少年が」が通学していた。このベラック村という所は、移住が昔から行われていることで有名だった。

－1875：リムーザンLimousin地方南部では、困って仕事を求めている人は、穀物を収穫するのに手が足りなくて困っている地域まで行って、ライ麦を鎌で刈り取る仕事をした。リムーザン地方南部の人には、長い間そういう種類の移動が見られた。しかし、以下に示すような移動は1875-1900の間にはなくなった。

1) フランス中部リムーザン地方コレーズ県［19］――ミルヴァシュMillevaches
2) 南フランス・ルエルグRouergue地方セガラSégala高原――マルジェリード Margeride山脈
3) フランス中南部中央山地コースCausses渓谷――コース Causses高原
   しかし、1900年を過ぎても継続したものがあった。以下の 4),5)がそうである。
4) 貧困家庭の多い北部の上リムーザンLimousin地方（これは第1次世界大戦の前夜まで継続した）――（特定の地域に限らない）
5) 干し草作りの集団――オーヴェルニュAuvergne地方カンタル県［15］北部や中央山地中東部メザンクMézenc山（干し草作りの集団が行く先は、農業の盛んで、高い賃金がもらえる所）

1880年代：(1)フランス南西部（ガスコーニュGascogne地方のガロンヌGaronne川中流）および西部（ポアトゥーPoitou地方／サントンジュSaintonge地方）の葡萄（ぶどう）の葉や根をブドウネアブラムシが襲うという年があった。その地域の人々は他の地域に職を求めて大量移住した。大量移住があって人口が少なくなった所に貧しく、過剰人口のフランス西部のブルターニュBretagne地方およびヴァンデ県［85］の人々が移入してきた。そして、荒廃した葡萄園を農場・牧草地として生き返らせた。

1880－90年代：鉄道が整備されて行くと、貧しい

地域からの季節労働者の移住がぐんと増加した。特に、フランス南東部アルプスAlps地方のオアザンOisans地域やフランス西部ブルターニュBretagne地方北部コート＝デユ＝ノール県［22］のような貧しい地域からの季節移住の数は1880年代および1890年代がピークだった。

1886：フランス南西部オート＝ガロンヌ県［31］のトウールーズToulouseから56㎞離れた村の教師が書いている「トウールーズへ行くなんて、人生の一大事だ」。

1887：ブルターニュBretagne半島に隣接するロアール＝アトランティック県［44］のナントNantesに自宅のある小学校の視察官が、ナントから40㎞離れた村ルジェLegeの教師に「ナントの自宅にぜひ来てください」と招請しました。すると、その教師は「そんな遠出ができるような天気の時なら。と言うのは普通の天気でも、おんぼろ乗合馬車だったら、片道4時間以上かかりますから」と付け加えた。

1899：(1)フランス中東部フランシュ＝コンテFranche-Comté地方ドゥー県［25］の人口444人の小さな村の40人は、今ではよその県で公務員になっている。また14人は、家事奉公人として、町で働いている。

(2)北仏セーヌ県［77］では、役所の部課の空きで、400人募集したところ、5万人も応募者がでた。

19世紀末：(1)アルプス山脈では、冬の半年間というものは、家に閉じ込められたまま。19世紀の終わりまでは、家畜と一緒に畜舎で暮らした。

(2)フランス中東部フランシュ＝コンテFranche-Comté地方のジュラJura山脈では、季節移動の歴史はほとんどない。ジュラ山脈地帯の人々は、家族が少なく、職人が多かったから、移住しないで済んだ。

(3)旅行というものは、パリ近辺でも、どうしても必要な時以外は、しないのがふつうだった。12,3㎞くらい離れた所なら、買い物に行く人はいたけれども、パリから60㎞離れている土地の人は、いくら金持ちでも、パリに一回行ったことがあるかどうか、という程度の人が多かった。

1900：(1)若者は都市を目指し、故郷をあとにするものがだんだん多くなった。この「田舎から町への大移動」の第一原因は「親の見栄だ」という学者もいた。

(2)パリ北西部ウール県［27］のある村での農家の息子で、農家を継いでいる割合は42%だった。これに対して農家の娘が農家にのこる割合は15%。

1900頃：フランス中央山地北東部のある村で年配の女性の思い出話／「1900年頃、若い人は田舎から町へ出て行った」。

4．3．5　運搬用動物：らば・ろば・馬

［Weber 200-3/211］

1840年代：スペイン国境地帯ピレネー地方では、郵便を届けるには、車類はなく、ラバを連れた配達員だけだった。

1840—87：「ラバ」と「ロバ」の頭数の変化。段々と減少している。車が出てくるまでは、「ラバ」と「ロバ」が主要な“足”代わりだった。

	「ラバ」	「ロバ」
1840	373,800	413,500
1862	331,000	396,200
1882	250,700	
1886		382,100
1887	237,400	

1848—52：ナポレオン三世Louis Napoleon (1848-52) の治世のこと。フランス南東部の中央山地南東部ローヌ川右岸に位置するプリヴァPrivas（現在アルデーシュ県［07］の県庁所在地）での交通といえば、たいてい「ラバ」だった。馬車はまだ一般的ではなかった。

1850：フランス中南部中央山地南のロゼール県［48］の人里離れた高原地帯では、19世紀の中頃まで車輪のついた乗物は見かけられなかった。

1857：フランス中南部の中央山地南部のアルデーシュ県［07］では、洪水によって、あるいは単に悪天候になっただけで、道路や孤立している村が流される状態だった。そうなるとラバも通行できなくなり、人は歩くしかない。

1860年代：道路が整備され、鉄道が敷設された1860年代以前は、運送手段は主としてラバだった。中央山地東側のオブナースAubenas（アルデーシュ県［07］）の絹をロアール県［42］サン＝テティエンヌSt-Etienneに運んだり、ロアンヌRoanne(ロアール県［42］) やヴィヴァレVivarais低地のワインをオーヴェルニュ高原、さらには、ロゼール県［48］のマンドMendeや、オート＝ロアール県［43］のル＝

ピュイLe Puyまで運んだのはラバだった。

1870年代末：1870年代の末になっても、学校視察官は、村の学校を視察するのに、長い道のりを馬の背にのって行くか、徒歩で行くか、それしかなかった。だから、学校視察官の報告の中には、その時の道路状況について触れていることがよくある。

1880：フランス中南部中央山地南東アルデーシュ県[07]のサン＝ピエールヴィルSaint-Pierrevilleに初めて馬車が登場したのはこの年のことだった。

1893—1907：フランス中南部中央山地南西部アヴェロン［12］県／「ロバ」と「馬」の数の変化。「馬」の数が増えている。

	「ロバ」(頭)	「馬」数(頭)
1893	3,265.	11,473.
1907	2,155.	14,500.

4．3．6　通信：郵便・電話・電報・新聞

［Weber 84/200/219-20］

1834—84：郵便物の量の変化

	一人当たり１年に受け取る郵便物
1834	3.64
1844	4.86
1854	9.06
1874	19.75
1884	37.49

この数字には、定期刊行物も含まれている。定期刊行物は主として都会の著名人が対象であり、それ以外はあまり普通のことではなかった。上の表をみると、1854年と1874年との間に大きな変化があるのが注意をひく。

1840年代：スペイン国境地帯ピレネー地方では、郵便を届けるには、車類はなく、ラバを連れた配達員だけだった。

1845—1888：フランス中部のコレーズ県［19］とクルーズ県［23］では、郵便切手の売上高が、この43年間（1845—88）で２倍半増えた。しかし、それでも全国平均の1/3にすぎなかった。

1848：イギリス郵便の前払い制度がフランスにも導入されることが決まった。実際に開始したのは、翌1849年だった。それ以後、手紙の料金はわずか４スーsous。

1851－55：この期間に、フランス各県の県庁所在地とパリとの間に電話が敷設完了した。一番最後になったのは、①フランス中南部中央山地南のロゼール県［48］のマンドMende市と②コルシカ島北部の港湾都市バスティアBastia市。しかし、県庁所在地より小さな市とパリとの間に電話が敷設されたのは、これよりももっと遅く、1870年代に入ってから。

1860—1908：フランス中央山地南西部アヴェロン県［12］は305の村からなる大きな県だった。しかも、たくさんの溪谷があり、その村々はお互いが孤立していた。そのため郵便配達は困難を極めた。それを反映して、郵便局の数は、下記の統計のように年々増加していった。

西暦	郵便局の設置数
1860	27
72	43
86	78
1900	110
08	145

1866－98：郵便為替は、1866年、まだ幼気（いたいけ）な少年が、親を助けて、ひとり行商に出掛けた。そうして儲けたお金がたまると、５フランずつ家に送金した。こうすれば、路上で追剝(おいはぎ)に会う心配もなかった。このような少年を救援する目的で始まった郵便為替は、印紙税が免除された1879年以後急速に利用度が高くなった。

	送金総額(単位：フラン)
1881	1450万
98	7億8900万

1880年代—**19**世紀末：この期間に鉄道が普及するにつれて、電報局の数も増えた。フランス南西部の県のなかで一番標準的なタルン県［81］における電報の数の変化の記録がある(下記参照)。1859年時には、この県では電報局はアルビAlbi一ケ所しかなく、

	電報の数
1859	663
1897	140,000 以上

電報はほとんどが公用だった。その後の増加は目ざましい。こういう事実が裏付けになって、フランスが一つの国である、という実感をもつ人々が増え

た。

1882－：スペインとの国境地帯ピレネー山脈東部のピレネー＝オリエンタル県［66］のモセMossetという村は、1882年迄は、プラドPradesまでの10㎞の道路も整備されなかった地域だった。しかし、そんな村にも20世紀になると、郵便局が設置された。

1894－5：ブルターニュBretagne地方では、これまでは、新聞といえばカトリック系のものを拾い読みするだけで、地元の伝統主義者たちが、パリ風の言語・衣服・作法などに対抗して書く絶望的な不平不満を、読むにすぎなかった。しかし、時の流れには抗しきれず、子どもも、その両親もだんだん、自分たちがフランス統合・フランス化の方向に歩みはじめているのに気づきはじめた。フランス化とは、自由な移動、進歩、経済的社会的向上、家からの解放を意味するものだった。

4．4　生活様式

4．4．1　職業(1)［Weber 209/211-7/280-1/283/285/287/293/321］

1830年代—1900：フランス南西部ドルドーニュ県［24］内部の鉄製品の製造販売業が徐々に減っていった。

1830's	熱風炉37基／鉄工所88
1864	31継続(33閉鎖)
1865	ほぼすべて　閉鎖
1900	純農業県になる

1840年代：(1)フランス中東部ブルゴーニュ地方にある広大な森林地帯のモルヴァンMarvanでは、伝統的な製材業が廃れ、毎年春になると、男たちは仕事を求め、パリに向かった。そこでは、波止場での荷揚げや建築現場での人足として働いた。一方、既婚の女性は、金持ちの家の、あるいは親が病気の、赤子に授乳する乳母として働くことが広まった。中には、夫婦共働きの家で、そういう乳母を求める人が増え始めた。

(2)スペイン国境地帯のアリエージュ県［09］でも、伝統的な鉱業、鉄鋼業、製炭業も廃り、生活が困窮した。こうして、いわゆる季節労働者が生まれた。

1847－8：綿が亜麻（あま）を市場から追い出した。規模の大きな紡績工場が進出すると、伝統的な家内工業の糸紡ぎ工場は、亜麻の時代から綿の時代に変わっていった。

1852－70(第二帝制)：次のような新しい生活用品が現れた／①夜になっても仕事ができる灯火、②浸水した水を早く取り出す発動機(ポンプ)、③労働者や建築現場の足場を保護する防水シート。

1859－61：フランス中南部リムーザンLimousin地方北西部オート＝ヴィエンヌ県［87］は陶器の名産地として有名。しかし、その陶器用の窯（かま）の数は減少傾向。

	窯　数
1859	42
1861	8　又は10

1850年代末：ワインで一番人気があるのは南フランスのワインだった。ルイ・フィリップLouis Philippeの治世(1830-48)の売上高の1/5にあたるワインが、1850年代末までに、リヨンLyon(中央山地北東部ローヌ県［69］の県庁所在地）で売られ、さらにパリの市場にまで進出した。

1860—1938：1860年には全国で105,000ヘクタール（ha）の亜麻（あま／アマ科）を、また180,000haの麻（あさ／クワ科）が栽培された。しかし、それから約80年後の1938年には、亜麻はわずか6,000haに減り、麻に至っては殆ど栽培されなくなった。

1866：『農業調査（1866)』には、期限付き労働者に対するいろいろな不満が挙げられている／賃金は騰がり、労働時間は短くなり、以前と比べて要求が大きい。

1866－1906：フランス中部リムーザン地方コレーズ県［19］では、1866-1906の間に、肥料の消費量は13倍に、農作物の収穫高は65倍に伸びた。

1867：フランス南東部中央山地南東のアルデーシュ県［07］とか、フランス東部のフランシュ＝コンテFranche-Comté地方などのように工場のあるところでは、子供でも、8,9才になればもう仕事についていた。1867年迄には、8才未満で一日15-17時間も働くなどということは、めったになかった。しかし、アルデーシュ県［07］でも、プリヴァPrivasとかアノネAnnonayとかいった町では、8—12才くらいの子なら、それくらいの長時間労働はざらだった。フランス北東部のロレーヌLorraine地方のムルト＝エ＝モーゼル県［54］では、20年たった1888年になっても労働状況は変わらなかった。

1870—71：普仏戦争（1870-1）で敗戦、死者が沢山出て、農地を耕す人手に不足をきたし、耕地が減少した。

1870年代：ピレネー山脈中部のアリエージュ県［09］では、最後の溶鉱炉が消えた。

1870—：鉄鋼業の生産高は1870年以降減少していった。

	生産高(単位：トン)
1853	144,000tons
1893	41,000
1910	3,000

1875：アルプス山脈中のイゼール県［38］のオアザンOisans地方では、製釘業は1875年までになくなった。

1889：ヴォージュ県［88］では、普仏戦争（1870-1）時は、まだ機織（はたお）りが盛んだった。しかし、1889年までには、機織工場が出てきたために、個人の機織業は倒産した。機織工場に勤めようとしてアルザス地方へ入って来る人々が多く、個人機織業倒産の傾向をさらに進めた。アルザス地方への流入人口がなければ、個人の機織業はまだ生き延びただろう。現に、オーヴェルニュAuvergne地方とブルターニュBretagne地方がそうだった。この二つの地方の零細機織業の衰運を確実にしたのは、鉄道の到来だった。

1890—96：フランスブルターニュ地方コート＝ドュ＝ノール県［22］ルーデアクLoudeacの機織工は1890年には頑張りぬいたけど、その衰勢は止められなかった。さらに、1896年にはブルターニュ地方で15,000人の織工・紡績工がいたが、もう過去の遺跡のようなものだった。

1894：フランス中部オーヴェルニュAuvergne地方ピュイ＝ド＝ドーム県［22］ティエールThiersを中心とする地域のような刃物類の伝統的産業地帯では、給料よりも「仕事の自由」に価値をおいていた。「このような素朴な生き方には我々が尊重しなければならないそれなりの伝統がある」と副知事は、ため息まじりに言った。

19世紀末：フランス中央部中央山地北部ピュイ＝ド＝ドーム県［22］の近辺では、鉱夫は、自分の農場をもつ人がいて、そういう人はできるだけ多くの休暇を、特に月曜日にとり、自分の農場を耕した。

1900：フランス中央山地北東部ローヌ県［69］リヨンLyonの商工会議所の調査／リヨンの近辺（ローヌ［69］、アン［01］、イゼール［38］、ロアール［42］、ソーヌ＝エ＝ロアール［71］、ヴォークリューズ［84］、以上の6県）には、小型の手織機は、まだ47,406基あった。リヨンの絹織物工（＝カニュcanuse）が断る金額で引き受ける零細規模の機織（はたおり）工たちの生き残りだった。

1901：アルプス山脈西端のボージュBauges山地では、最後の製釘（せいてい）工場が閉鎖になったのがこの年。それは、サヴォアSavoie地方のアルプス山中アヌシーAnnecyと同地方のアルベール・ヴィルAlbertvilleとの間に鉄道が開設した年でもあった。

4．4．2　職業(2)：乳母［Weber 283］

1840年代：フランス中東部のブルゴーニュ地方にある広大な森林地帯のモルヴァンMarvanでは、伝統的な製材業が廃れ、毎年春になると、男たちは仕事を求め、パリに向かった。そこでは、波止場での荷揚げや建築現場での人足として働いた。一方、既婚の女性は、金持ちの家の、あるいは親が病気の、赤子に授乳する乳母として働くことが広まった。中には、夫婦共働きの家で、そういう乳母を求める人が増え始めた。

1853：フランス中東部ブルゴーニュ地方北西部に位置するヨンヌ県［89］のアヴァロンAvallon郡の助役の報告によると、極貧が常態の地域に、「(乳母としての）授乳」業が広まった。一人の女性が、この仕事を3期間終わらせば、家を一軒建てることができるくらいの資金ができた。地域によっては、この仕事で3人に2人の割合でパリに出た。パリに出ない人は、たいてい引き受ける乳児を自分の家に連れてきて育てた。

→**1865**：フランス中東部ブルゴーニュBourgogne地方の東部に位置するモルヴァンMorvan山地(広大な森林地)／単に習慣で、あるいは家計の足しに夫や家族に強いられて乳母になる人が多かった。まだ若くして、母乳がでなくなり、家計に貢献できなくなり、自殺した女性もいた。1860年代の中頃迄には、モルヴァン地方のこのもっとも重要な産業は、赤子にとって命取りになることもあるから、やめるべきだと主張した医師もいた。

1884—1900：フランス南西部ドルドーニュ県［24］

ペリゴールPerigord地方出身の「乳母産業」は実入りがよかった。

西暦	月額(フラン)
1884	20
1888	25

収入はこの額以外に、乳離れの時には「離乳祝い」が出た。1900年ごろ、未婚の娘が子を生んだということを知った父親が喜んだ、という話を聞いた。

1890年代：ブルターニュ地方は、教区によっては、女性の半分が所謂「出稼ぎ乳母産業」で1-3年の間、家を空け、新しい'文化'をもって帰ってくる。自分たちの伝統的なライフ・スタイルを「足かせ」だと言って非難する。そこで、また子どもを生みたいと思う。そうすれば、また「出稼ぎ乳母産業」で家をでることが出来るからだ。さらに悪いことに、そういう話が地域の若い人の間の以前からの不満に火をつけたあげく、その人達のただただこの土地を出たいという気持ちを募らせた。

4．4．3　職業(3)：行商［Weber 280-1］

1841：山岳地方をまわる行商の荷物の中身を見ると

	商品名	量
(1)	巻糸	507ダース
(2)	絹	24反
(3)	櫛	3ダース
(4)	針	3,000本
(5)	ピン	9,800本
(6)	鉛筆	4ダース
(7)	ボタン	27グロス(=3,888個)
(8)	嗅ぎタバコ用の箱	18個
(9)	指貫(裁縫用)	3ダース
(10)	磁器(リモージュ焼)	3箱
(11)	ペン	4ダース
(12)	羽軸	100本
(13)	鋏(はさみ)	2ダース
(14)	石鹸	1/2ダース
(15)	小刀	1/2ダース
(16)	ズボンつり	1/2ダース
(17)	留め金＋留め穴	各1/2ダース

〆めて294.42フラン（仕入れ価格）を払えば、儲けはほとんどなかったはずだ。

1880－1921：フランス南東部ドーフィネDauphiné地方のオアザンOisans地域では行商に出る家庭の割合が段々減ってきた。行商に出る理由としては、孤立した地域に住んでいて、生活が貧しかったことが挙げられる。行商に出る割合がだんだん減っていった理由としては、①道路が整備され、人の往来がし易くなり、②生活が以前よりは豊かになったことが挙げられる。

西暦	割合	
1880	1/3	（3家庭のうち1家庭の
1911	1/18	割合で行商にでる、意
1921	1/37	味。以下同様）

5　結　語

1880年以降、急速に標準語化への流れがスピードを増したように感じられるのは、長期共和制での安定した教育行政の力が、それまでのギゾーの初等教育法（1833）・デュリュイの教育法令（1867）と較べても、大きな貢献をしたことは否定できません。しかし、見落としてならないのは、ハードウェアとしての兵役制度の確立・道路の拡充・河川交通と入れ代わった鉄道の整備と、そのソフトウェアとしての国民の移動の活発化が渾然一体となって、標準語教育の立法・行政の効果を倍増させたであろうということです。――「教育制度」を主軸に、その周辺を副動因としての「兵役制」、「交通制度」（道路・鉄道・河川）、が固めます。その結果として、フランス国民の移動・移住を促します。今度は、その「移動・移住」が、原因になって「教育制度」が求める方向を助勢する結果になり、それが又、「兵役制」、「交通制度」をさらに充実させるきっかけを作ります。このような循環する図式でパリ語の加速度的な普及過程が説明できます。以上のような図式が、**4．1－4．4**の年表を総合すると浮かび上がります。地域・年齢・教育度・男女差、また個人によるパリ語定着の進度差はとうぜんです。そういう要因を含みつつ、パリ語普及という見果てぬ夢を追いつづける姿が19世紀のフランスでした。――上でバラバラにして示した歴史的事実が、総合的な形で同時代の人にどう受け取られたかを知る一つの方法は、同時代にかかれた写実主義の書き物が便利です。例えば、スタ

ンダール『赤と黒』の副題は「1830年年代記」とあります。そこには背景描写として、「徴兵が行われたがジュリアンは神学生という資格でそれを免ぜられた」とあったり、左官たちに「しょうがねえ！行ってこなくちゃなるまいよ。また徴兵だ…兵隊になりに行くやつは、乞食ばかりだよ。金のあるやつは、みんな国に残っていらあ」と言わせています（岩波文庫・上、p.330)。1869年刊のドーデ作には、「年弱の2人はアルルの祖母のもとにいる。彼らは読み方を覚えるまで、また「初聖体」の済むまで、そこにいることになっている。何しろここでは、教会にも学校にもあまり遠いし、」と南仏の田舎の様子が見られます（岩波文庫・p.209)。1890年刊のゾラ作には「列車の通過を知らせるベルが鳴るたびに、ラッパを吹く。やがて列車が通過して線路が閉ざされると、次の番小屋にそれを知らせるためにボタンを押し、前の番小屋に線路を開けさせるよう別のボタンを押す」と鉄道の描写が見られます（筑摩書房・p.263)。

参照文献

DUVERGER, Maurice (1993) *Les consitutions de la France,* Paris:Presses Universitaires de France (Que sais-je?, 162) (時本義昭・訳 (1995)『フランス憲法史』みすず書房)

GILLIÉRON, Jules & Edmond EDMONT (1902) *ALF Notice,* Paris:Honoré Champion

GILLIÉRON, Jules & J. MONGIN (1905) *Scier dans la Gaule Romane du Sud et de l'Est,* Paris:Honoré Champion

JOCHNOWITZ, George (1973) *Dialect Boundaries and the Question of Franco-Provençal,* The Hague:Mouton.

POP, Sever (1950) *La Dialectologie / Aperçu historique et methodes d'enquetes linguistiques,*I, II, Louvain: J.Duculot.

WEBER, Eugen (1976) *Peasants into Frenchmen / The Modernization of Rural France 1870-1914,* California: Stanford University Press.

スタンダール Stendhal（桑原武夫／生島遼一・共訳）(1958)『赤と黒（上・下)』（岩波文庫).

ゾラEmile Zola（河内清・訳）(1967)『獣人』（世界文学全集29)、筑摩書房.

ドーデAlphonse Daudet（桜田佐・訳）(1996)『風車小屋だより』（岩波文庫).